Vorbereitung für Reise nach Berlin

事前学習会・新宿区長表敬訪問

鵜飼孝行

① 第 1 回研修　平成 29 年 7 月 12 日

とうとうベルリン市ミッテ区との青少年交流派遣のプログラムが始動しました。定期試験の勉強で忙しい高校生、大学生など多種多様の青少年たちが集結し、自己紹介やプログラムの内容を理解していくに連れて、ドイツに行く実感がなかった私たちでしたが、このプログラムに参加するという事実が徐々に現実味を増していき、期待に胸を膨らませる者もいれば、自国を離れての滞在に不安を覚えた者もいたことでしょう。

② 第 2 回研修　平成 29 年 7 月 19 日

青少年との交流、異文化交流をしていく中でぶち当たる壁の 1 つとして、「言語の壁」があります。私たちのほとんどがドイツに渡るのが初めてだったため、当然ドイツ語に関する知識は全くありませんでした。そのため、ドイツ語の語学学習が始まりました。ドイツ語を話すことは無論、ドイツ語を聞く機会もないため、やはり難しいが楽しくレッスンに望めたように思います。

③ 第 3 回研修　平成 29 年 7 月 26 日

研修最終日となったこの日は、ベルリンの壁の崩壊前後の中での親子愛が描かれた映画を鑑賞しました。ドイツが東西に分裂していたことに対する認識はあっても、その時ドイツの人たちはどう思っていたのか、どういう生活を送って、どんな苦悩があったのかは全く知らなかったため、とても興味深いものでした。この計 3 回の事前研修を通して、ドイツという国がより立体的に見えてきたように思います。皆ドイツに一刻も早く旅立ちたいという思いが高まり、プラスの影響を皆が与えられた充実した研修になりました。

④ 新宿区長表敬訪問　平成 29 年 8 月 2 日

派遣前最終打ち合わせとなったこの日は、吉住健一区長を表敬訪問しました。新宿区の行政のトップの方に会えるということで皆緊張した面持ちでした。私たちは緊張しながら自己紹介を行い、その後歓談時間が設けられました。新宿区の政策に対する思いなど、普段絶対に聞けないような話も聞くことができました。また、このベルリン市ミッテ区との青少年交流派遣のプログラムが歴史的にもいかに重要か、新宿良い所、悪い所を皆で話し合うなど、とても充実した有意義な時間を過ごせました。そして同時にこのメンバーでドイツに向かうのだと一番実感した日でもありました。

Anfang der Reise　　8 月 18 日（金）　～1 日目～

吉野　晧

8 月 18 日の朝、羽田空港に集合し、私達のドイツへの 13 日間の旅が始まった。私はヨーロッパに行くのが初めてで、フライト時間が約 12 時間と知った時には正直驚きました。ドイツに行くというワクワク感と日本語が日常的には使われていない世界へ飛び込む不安が複雑に入り交じった不思議な気持ちでした。

機内では、離陸して 30 分も経っていないのに、既に寝ている人も

いましたね(笑)。時差のことを考えると、到着するのが現地時間で 18 時くらいなので、機内で眠り込んでしまうと現地で睡眠できなくなってしまうと私は考えました。そこで、私はひたすら映画を観ることにしました。特に実写化された「美女と野獣（Beauty and the Beast)」にはハマってしまい、3 回見て、3 回とも感動して泣いてしまいました。

機内食は思っていたよりも美味しかったです。正直、おかわりをしたいくらいでした(笑)。ただ、パンだけはシベリアにずっと埋まってしまっていたかのように、カチンコチンで冷たかったですね…

何とかミュンヘン空港に到着し、ベルリンへ向かうために国内線の中型機に乗りました。予定では 1 時間での到着だったが、生憎の悪天候で 1 時間程遅れての到着でした。（私は寝ていたので（!?)、全く知らない…)

ベルリン・テーゲル空港で、通訳をしてくれる陽子さんと現地でミッテ区側の職員であるオリバー（Oliver）とノーベルト（Nobert）に初めて顔を合わせました。

現地 22 時頃にホステルに到着しました。そこで遅めの晩御飯として 1 人 1 枚のピザを食べることになってしまいました。後から、2 人 1 枚で良かったのではないかという話になりましたが、長い旅路でみんなの疲労もピークに達しており、もはや誰も頭が回らない状況でした。当然、食べきれない人もいて、私と今回同じプログラムに参加した孝行がフードファイティングをすることになりました。今思えば、これがこの旅全体を通じて繰り広げられるベルリン・フードファイティングの幕開けでした。

Um Berlin zu wissen　　8 月 19 日（土）　～ 2 日目～

星川　優奈

ベルリンで初めて迎えた朝は、爽やかながら、東京とは比べ物にならないほど涼しいものでした。そんな中、朝食をホステルにてバイキング形式で頂き、地下鉄でミッテ区の青少年施設である Werk9 へ向かいました。

Werk9 では、これからの滞在にあたってのオリエンテーションを行いました。Werk9 に来るまでで気づいたドイツと日本との違いや、これからやりたいことなどを互いに話し合い、文化の違いなどで生まれる注意を受け、電車のチケットと翻訳の際使用するヘッドセットを頂きました。頂いた電車のチケット一枚で 1 週間乗り放題と聞いて驚きました。

オリエンテーション後に Werk9 の近くにあるバイエルン地方に起源を持つレストラン、レーベンブロイ（Löwenbräu） でドイツ料理を頂きました。ボリュームたっぷりでどれも美味しかったです。

昼食後、音声ガイド付きの二階建てバスに乗ってベルリン市内観光をしました。朝とは違い日差しが強く、バスの 2 階部分の日が当たるところは想像以上に暑かったのですが、風は涼しかったので丁度良いくらいでした。ガイドを聞きながら市内を回るバスからは、有名なベルリンの壁はもちろん、ホロコーストやドイツ連邦議会議事堂、戦勝記念塔など、歴史的にも重要な建造物が見られました。他にも、環境先進国というだけあって緑豊かな景色が楽しめました。これからの滞在期間にこれらの景色や建造物の歴史を知ることができるかと思うと心が踊ります。

市内観光の最後に Park inn ホテルの展望台から市内を一望しました。バスでの観光で近くを通った建物がマッチ箱のようでとても可愛らしく、綺麗でした。ドイツは日が沈むのが遅かったので、つい時間を忘れて眺めてしまい、気がついたら午後 8 時。

観光を終え、 Park inn ホテルで特別に用意して頂いたビュッフェを頂きました。とても豪華で美味しかったです。

滞在 2 日目、これから先の滞在期間が楽しみになるような 1 日でした。

Unterdrückung und Freiheit　　8 月 20 日（水）　～3 日目～

坂田　惟仁

朝 9:30 にホステルを出発して電車でポツダム広場（Potsdamerplatz）に移動して徒歩でホロコースト記念館に向かいました。そして記念館の前で初めてドイツの青少年たちと会いました。そこからは一緒に行動しました。広場では高さもバラバラのブロックがたくさん並んでいました。私たちはそこでブロックを色々な角度から自由に見る時間を与えてもらいました。その後、それぞれがどのように感じたのかを共有しました。冷たい、高さに規則がない、等間隔に並んでいる、雰囲気が重いなど人によって感じ方が違いました。記念館内では、様々な資料を見ることができました。家族構成や家族のその後まで知ることができました。

ホロコースト記念碑を出た後、ブランデンブルグ門（Brandenburger Tor）に向かいました。2 日目に観光バスから見ましたが、ゆっくり見て写真を撮ることができました。

昼食を取った後、テンペルホーフ公園（Tempelhofer Freiheit）に移動しました。テンペルホーフ公園は昔、空港として使われていましたが、今は大きな公園になっています。そこでは、ドイツの青少年と一緒にミニゴルフをしました。ただのミニゴルフではなく、18 個のコース 1 つ 1 つがアート作品になっていて、見ているのも面白かったです。普通のゴルフよりも遥かに難しかったです。ちなみに私は全くできませんでした。

夕食は公園の中にあるお店で食べました。私はドイツに来て初めてソーセージを食べました。日本のソーセージよりも大きくてびっくりしました。さらにフライドポテトもあったので、満腹でした。

帰りは、広い公園を歩きながらみんなでワイワイ話しながら帰ったのが印象的でした。公園には、ジョギングをする人やローラースケートをする人がいて賑わっていました。夕方だったので周りに高い建物がなく夕日が綺麗でした。その夜は次の日に備えて早く寝ました。

In Wedding nicht für „Wedding“　　8 月 21 日（月）　～4 日目～

山口　翔子

朝ごはんのあと、ホステルを出発し、地下鉄（U-Bahn）でヴェディング（Wedding）地区へ。ヴェディング地区は、ミッテ区の中でも住宅街が連なる地区です。特に、ベルリンにやってきた移民の人々が多く住んでいる土地として知られています。

説明をしてくださるワッティーム（Kujtim）さんとドゥア（Dua）さんを先頭に、街歩きはスタート！

最初のポイント地点は、ショッピングセンター。この地区に住む人々は、ここによく足を運ぶそうです。

第二次世界大戦後、ヴェディング地区にはその復興を助けるためにベルリンにやってきたトルコ人などの移民の人々が住み始めました。現在では、難民としてドイツへ逃れてきた人々も増えています。お二人も、それぞれコソヴォとパレスチナの出身であり、ここベルリンで学生生活を送っています。たとえドイツ語を学んでいなくとも、この施設にはみんなが来ることができるので、ぜひ残してほしいと思いました。ヴェディング地区に住む青少年の生の声が感じられた場所でした。

次のポイント地点は、住宅街の一角。菩提樹の並木道を抜け、マンションの前で立ち止まりました。ヴェディング地区には過去から現在にかけて、世界各地から移ってきた人々が生活をしています。しかし、最近は家賃が高くなってきており、困っているそうです。また、ベルリンにおいての移民の見られ方は、昔に比べて改善はされてきたものの、まだ悪い印象が残っているといいます。その理由の一つとして挙げられるのが、貧困です。他にも、国と移民との間では話し合いの場が持たれていないことなど、たくさんの要因が問題を引き起こしているそうです。現在、お二人はウェディング地区について理解を深めてもらうために、「ゲットーシュトレーバー（Ghettostreber）」としてこの街歩きを行っています。「Ghetto」は、ユダヤの人々が住んでいる地域のことを、「Streber」は、がり勉という意味で、大学まで進学する人のことを揶揄した言葉だということです。もっと自分たちの暮らす街のことを知ってもらいたい、というお二人の思いや、実体験を交えたお話はとても興味深く、現在のベルリンが抱える問題について考えることができた貴重な時間になりました。

街歩きも終盤を迎え、最後のポイント地点はモスクです。住宅街のなかに佇んでおり、中には絨毯が敷かれているため、靴を脱いで上がります。ここでは、イスラームについて

の説明や質疑応答の時間になりました。なぜスカーフを巻くのか？断食は子供も行うのか？町中に貼られていたポスターについてなど様々な質問が出ました。近年、頻発するテロとの関りから取り上げられることの多いイスラームですが、それを信仰する人々にとっては日常生活に根付いたごく当たり前の存在であり、とても大事にされているものなのだとあらためて気づかされました。

ここで街歩きは終了！雨が降り出し、お昼ごはんを食べるトルコ料理のお店へ急ぎます。このお店では、ハラルという、食べ物にするためのイスラーム教の手順に則った食事が出されているそうです。ケバブは野菜もお肉もたくさん詰まっていて、美味しかったです！

雨天のため、午後は自由時間になりました。日本人とミッテ区の青少年の混合で３組に分かれ、それぞれ、ショッピング、イーストサイドギャラリー、国際庭園博覧会（IGA）へ行きました。

国際庭園博覧会の会場はとても広く、ロープウェイに乗って庭園が展示されている場所へ移動します。あいにくの雨でしたが、ロープウェイからは上からの眺めを楽しむことが出来ました！ロープウェイを降りてからは、徒歩で世界各地の庭園を巡っていきます。宮殿にありそうな左右対称のイタリアの庭園、イギリスの庭園は様々な品種の薔薇が色鮮やかに咲き誇っていました。それぞれの庭園をつなぐ道の両脇にもたくさんの植物が植えられています。

立体迷路があったので、全員でチャレンジすることに！ですが、予想以上に難しく、迷路の中心にあるゴールになかなかたどり着けないまま、15 分以上が経過…。途中から雨もぱらつき始め、行ったり来たりを繰り返しつつ、勘と記憶力を頼りにゴールしました！！

迷路を脱出後、鉄棒で遊んだりしながら、アジアの庭園へ向かうことに。中国庭園では、中華風の建物の中にハスの浮く大きな池や柳の木があり、レストランも併設されていました。次の韓国はまた趣が異なり、塗りこめられた白壁の建物のなかは砂地で、石像がいくつか並んでいます。日本庭園は、せせらぎが流れる野山の風景や、京都の銀閣寺や龍安寺で有名な枯山水の庭園が表現されていました。

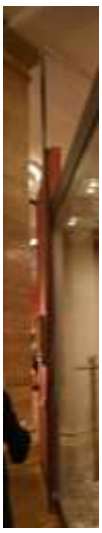
締めくくりに展望台へ上り、ベルリンを一望しました。曇り空も和らぎ、夕陽がさした

眺めはとても綺麗でした。

Geschichte in Deutschland und Berlin　　8 月 22 日（火）　～5 日目～

大野　浩美

前半最後のホステルの日，今日は副区長表敬という大きな任務がありました。朝いつも通り目が覚め、スーツを着用しました。気が引き締まります。



9 時 30 分、ミッテ区職員のオリバー（Oliver）引率のもと、ホステルからドイツ歴史博物館へ出発しました。19 日に市内観光バスからみた風景を実際に歩き，博物館に到着しました。署名を求めるという手口を用いるスリ集団に遭遇し、緊張のひと時がありました。博物館では，職員の方のガイドのもとドイツの歴史を学びました。カロリング朝フランク王国を建国したカール大帝の説明を受けたのち、三十年戦争とフランス革命で使われた武器を見ました。三十年戦争では，馬に乗りながら使える小ぶりな武器やとても長い槍がありましたが、フランス革命においてはより発展した銃などの武器がありました。時代と共に戦い方が変化したのだと感じました。最後は第二次世界大戦の展示を見ました。アウシュビッツ強制収容所に関する説明や展示もあり、いかにヒトラーの力が大きく、どれだけ多くの人が苦しめられたのかを学び，考えさせられるものがありました。見学終了後、いつも通りお礼をする時間となり、渡辺由佳ちゃんが代表として職員の方に日本からのプレゼントをお渡ししました。

12 時頃，博物館からフンボルト大学に向かい，学食でお昼をとりました。ご飯は、パエリア、中国風ヌードル、ガチョウのホワイトソース風の３種類から選ぶことができ，私は中国風ヌードルを選択しました。こちらの麺は一本一本が短く、その方が現地の人々には食べやすいのかもしれないと感じました。海外の大学の学食を初体験し、面白い経験ができました。

13 時ごろ、ミッテ区役所に向かい出発しました。ベルリン中央駅(Berlin Hauptbahnhof)という大きな駅で降り、そこからバスに乗り区役所の最寄りのバス停に到着しました。13 時半頃、区役所前でノーベルト（Nobert）と合流し建物内に入りました。区役所内はシンプルなデザインで落ち着いた印象を受けました。ゴーテ副区長とお会いし、会議室にて副区長とお話をしました。初めに副区長がベルリンの歴史について説明してくださいました。ベルリンが東西２つに分かれたために、オペラ座や動物園など重要なものは必ず 2 つずつ存在する，というお話が印象に残りました。初めは小さかったベルリンが徐々に面積を広げていく過程が興味深かったです。青少年と副区長が質問をし合い、最後に青少年側の自己紹介をしました。全員、派遣前に教わったドイツ語で話しました。更に、副区長からアンペルマングッズや水筒などのプレゼントを頂きました。階段で集合写真を撮影し、区長表敬は終了しました。

15 時半頃，地下鉄でホステルの最寄り駅に着くとハプニングが発生。電車のドアが 1 つ壊れていたために、降り遅れたのです。鵜飼孝行くん、吉野晧くん、そして私でした。ドアを再び開けようと試みましたが上手くいかず、みんなに駅に再び戻ると告げ、電車に残りました。1 人だったら不安になったと思いますが、3 人だったので落ち着いて行動することができました。次の駅で降り，反対向きの電車に乗ってハインリッヒハイネ通り（Heinrich Heine Str.）駅で降りると、財団職員の嘉山さんが待っていてくださいました。日本でもなかなかしない経験をし、いい思い出ができました。

BBQ まで自由時間ということで、洗濯に行く組とホステルでゴルミッツへの準備をする組に分かれました。そしてついに 19 時から Werk9 にてホストファミリーとの会談が始まりました。この日初めて，ホストファミリーのセレン（Selen）とそのお母さんに会い、話をしました。2 人とも事前のメールで顔を知っていたので、すぐにわかりました。BBQ の肉やお菓子を食べながら、ホームステイ中の土日に何をしたいかを話しました。日曜日はセレンのアルティメットフリスビーの試合があるため、お母さんが一緒に行動してくれることになりました。大

体何をするのかが決まり、他のホストファミリーとも会話をし、BBQ は終わりました。私達はホステルに戻り，前半最後のホステルでの夜を過ごしました。

Nach Gollmitz nach dem Essen „Curry-Wurst“　　**8 月 23 日（水）　～6 日目～**

森下　瑠里花

今日は 1 泊分の荷物を持って、ゴルミッツという田舎町に向かう日です。

ベルリンから車で移動する前にかなり時間があったので、グループに分かれ、昼食がてら出掛けました。

私たちのグループはチェックポイントチャーリーを見学後、私の希望でトラム（路面電車）に乗りました。街中を行き交うトラムを毎日見ていて、どうしても乗りたかったのです。行き先も決まっていない、行くあてのない旅だったので、賛同してくれたメンバーに感謝です。適当なところで乗り換えようと思い、降車すると、なんとそこにはカリーヴルスト（カレー粉とケチャップのかかったソーセージ。ベルリンのご当地グルメ）の発祥の店がありました。ちょうどまもなく開店するタイミングで、地元の人々が集まってきているところでした。もちろんそこで、お昼を食べました。サクサクふわふわで、ぱくぱく食べていたら、あっという間になくなってしまうほどの美味しさでした！！その後、トラムを乗り換え、また別の路線を走るトラムに乗っていると、ベルリンの壁と、壁を撤去したところに壁と同じ高さで立てられた無数のポールが見えてきたので、これは間近で見たいと思い、下車しました。ぶらり途中下車の旅気分です。近くにはベルリンの壁記念館もあり、数々の展示から当時の状況や人々の

気持ちを学びました。

他の班は、ショッピングモールに行ったり、街歩きに繰り出したりしたそうですが、なぜか皆、各々の場所でカリーヴルストを昼食にしていました。しかし、その価格には開きがありました。皆同じものを食べたのに…。観光地の闇ですね。

自由行動後は、ゴルミッツに向かいました。

ゴルミッツはのどかで素敵なところでした。コテージ主から水車や小麦ひきの説明を聞いたり、庭で卓球やバドミントンをしたりしました。夕食はバーベキューでした。夜はキャンプファイヤーの火の周りに座り、満天の星空の下で、流れ星を探しながらたくさん話をしました。私は、将来の夢やお互いの国のことなど、いろいろ話をしていたら、いつの間にか日付を越えてしまいました。そして、ほとんどの日本人はコテージで寝ましたが、私はドイツの青少年達と一緒にテントで寝ました。凍えるような寒さでしたが、キャンプグッズを用意してもらったおかげで、ほぼ爆睡しました。

Wanderer　　8 月 24 日（木）　～7 日目～

渡辺　由佳

この日は、この上なく素晴らしい場所、ゴルミッツでの目覚めです。少し早く起きたので、1 人で大きな家の中と庭を散歩しました。夜中に雨が降っていたらしく、庭の草花にはきれいな朝露がありました。湿度が低く、涼しくてとても気持ちがよかったです。どこからともなく定期的に、ニワトリのコケコッコーという鳴き声がはっきりと聞こえてきました。

ゴルミッツの家の中での朝食は、かまどで焼いたパンや、多種多様なハムとチーズ。コーヒーや紅茶も何種類か用意されていて、ベルリンのホステルの朝食でも似たようなものが並んでいましたが、どれも新鮮で味は大きく違い、とても美味しかったです！

朝食後、ゴルミッツの大きな家の 1 階に皆が集まり、ミニゲームをすることになり、通訳の陽子さんからゲームの説明がありました。ゲームには、3 つのルールがありました。1 つ目は沈黙を保つこと。2 つ目は陽子さんの指示に従うこと、そして 3 つ目は、「ストップ」と言われるまでゲームを続けることでした。4,5 人のグループに分けられ、それぞれ別の部屋に行きました。そこにはペンと紙、サイコロが 1 つあり、グループ独自のルールも設けられていました。それは、紙にメンバー全員の名前を書き、サイコロを 1 人ずつ転がして行って、「5」の目が出たらその人の名前の横に縦棒を書いていく、またゲームを続ける間、つまらなさそうな顔をする、というなんともおかしなルールでした。しばらく、サイコロを回していると、陽子さんが部屋に入ってきて、メンバーのうちの 1 人を部屋から連れ出して行きました。それでもなお、ゲームを続けていると、今度は他のグループから新しく 1 人の子が入ってきました。その子は、始めはルールを掴めず、なぜ皆がつまらなさそうにしているのか分からなさそうでした。しかし、他の人のやるのを見て、すぐにルールを見つけたようで、「5」の目が出たら自分も縦棒を書いていました。

メンバーの入れ替えがもう少し繰り返された後で、ゲーム終了が告げられ、再び皆が 1 階に集まりました。そこでは、自分のグループを離れた人、新しいグループに入った人や、逆に一度もグループが変わらなかった人がそれぞれの感想を順番に答えていきました。

ひと通り、皆が発言し終わった後、ミッテ区職員のオリバーが話を始めました。用意してあった模造紙には 3 つの図が書いてありました。

1 つ目は„Exklusion“（除外、排除）で、同じ人々が 1 つにまとまっていて、それとは違っている人々がその円の外側にいるというもの、2 つ目は„Integration“（統合）で、同じ人々の大きな円の中に他の人々が小さな円になって入っているもの、そして 3 つ目は„Inclusion“（包含、包括）で、大きな 1 つの円の中に、全ての人がまんべんなく混ざっているものでした。

これらは、ある国、宗教 etc.の人々と、他の国、宗教の人々との関係を表しているわけですが、この中で最も望ましい状態が 3 つ目であることは明らかでしょう。しかし、この状態の継続を実現するのは難しいもので、実際、今回のプログラムの中でも、いつのまにか日本人同士、ドイツ人同士で話していた、ということがありました。そんな時、少しそれを悲しく思った子もいて、「日本語は分からないから、日本人同士でも英語を使ってー！」と言われたときは心が痛みました。いつも、そんな状況にしないようにするのは難しいと思いましたが、今回の大きな目的の 1 つは青少年交流なので、それ以後は皆が英語を使うように意識し、努力していたように思います。その重要性に気づかされたという意味でも、このミニゲームとディスカッションをすることができて、良かったと思いました。

朝食後から少し経ち、ゴルミッツと、そこの人々との別れを惜しみながら、3 台のワゴンで出発して、お城に向かいます。ボイツェンブルク城（Schloss Boitzenburg）は、赤茶色の屋根に真っ白の壁で美しいお城でした。いいなと思ったのは、周りが自然に囲まれていること。少し自由時間が設けられたので、ホストシスターと 2 人で辺りを散歩しました。広々していて緑が多いだけでなく、大きな池やヤギやモルモットなどの動物が飼育されているところがあったりして、こんな光景は日本には無いなぁと思いました。

皆が集合し再びワゴンに乗って、すぐ近くのチョコレート工場へ向かいました。そこで、まず小さなアイスクリーム屋さんで、みんなでアイスを食べました。様々な種類があり、

迷いましたが、キャラメルとティラミスのアイスクリームにしました。甘すぎず、おいしかったです。ちなみに、ベルリン市内にも、アイスクリームやジェラート屋さんがたくさんあり、安くておいしい！

さて、お腹が満たされたところで、いよいよチョコレート工場の中へ。とても大きくて、たくさんの人が働いている工場のイメージを持っていました(チャーリーとチョコレート工場のイメージです（笑）が、実際はもっと小さく働いている人も少なくて、アットホームな感じのチョコレート工場でした。しかし、ちゃんとおいしいチョコレートを作って売っていました。色んな動物の形のチョコレートなど、とてもかわいいチョコレートが売ってあり、みんなそれぞれ気に入ったものを買っていました。私は犬の形のチョコレートなどを買いましたが、かわいすぎて、食べるのがもったいないくらいでした。

再びワゴンに乗って、田舎町のとあるレストランでお昼を食べました。じゃがいもを使った料理が多く、美味しいものと、あまり味がないものがありました（笑)。その後、食べ終わった人から周囲を少し散策しました。小さな教会がひとつありましたが、他は家々が並んでいるような田舎で、日本人青少年とドイツ人青少年とが歩きながらおしゃべりをしたのもいい思い出です。途中で、真っ黒のハリボーを日本人全員が食べさせられましたが、不味くてビックリしました（笑)。

再びワゴンに長めに乗って、ベルリン市内に戻りました。車の中ではチョコが溶けないように注意しながら、ドイツ人を含め皆で歌を歌ったりして、その時間を楽しみました。A&O ホステルに戻り、荷物整理をして、いよいよホームステイ先へ！日本人達は暫しのお別れをし、それぞれのホストシスター・ブラザーと、お互いドキドキしながら、それぞれの家に行きました。はじめてホームステイ先で眠った夜でした。

Mitte des Programms in Berlin Mitte　　8 月 25 日（木）　～8 日目～

中田　晃仁

約 2 週間に及ぶこのプログラムも気付けば折り返し地点です。この日は、Werk9 においての中間報告から始まります。通訳の陽子さんを中心にして、ここまで経験したこと・感じたことを振り返ります。その一方で、何かやり残したことはないか、残りの時間で何ができるかについても再確認することで、プログラムをより有意義なものするために各々もう一度気を引き締めます。この中間報告は、プログラムの中でも特に重要な時間であると見なされており、本来なら午前中の時間を丸々利用するはずでした。しかし、今回は早めに切り上げました。というのも、青少年一同驚く、とあるサプライズが待っていたからです。

それはベルリン放送交響楽団からの招待でした。ベルリン放送交響楽団とは、1923 年に設立された世界 TOP20 にも入る実力を誇るベルリン代表の交響楽団です。実は、2019 年の来日に向けて、前日に団長や財団職員の嘉山さんが協議を行った際に、楽団のご厚意で練習風景を見学させて頂くことになりました。音楽に造詣のある翔子や優奈は勿論のこと、何の知識も持ち合わせていない私も、その圧倒的に美しい音色に感動しました。中には、気持ち良すぎたのか夢の世界に入る青少年も。練習を眺めている内に気付いたことですが、指揮者が指示を出す時に使う言語がコロコロ変わっていました。具体的にはドイツ語と英語なのですが、それはもうチャンポン状態です。つまり、彼はドイツ人ではありません。後で調べてみると、ロシア人でした。日本の交響楽団の現状は分かりませんが、ドイツの多文化性を感じる瞬間でした。

ベルリン放送交響楽団を後にした私たちは、また werk9 に向かいます。その途中、シュ

タットミッテ（Stadtmitte）駅のすぐ近くにある「カンプス（Kamps)」というドイツで有名なパン屋のチェーン店で昼食を摂りました。フレッシュなサンドイッチから甘々な菓子パンまで様々な種類を楽しみました。とても美味しいのですが、日本のパン屋の方が創造性に富んで面白いかなと個人的には思います。

さて、Werk9 に戻った私たちは、あるワークショップの発表会を見学しました。それは、昨年メルケル首相の号令の下でベルリンへ逃れてきた難民の青少年と、ドイツの青少年の交流を目的としたものでした。最初の 30 分ほどは彼ら青少年が創作したと思われる異文化交流をテーマにした劇を見て、その後はベルリンの名所と自分の大切なものを同じ空間に表現した彼らの「BOX」と称した芸術を各々鑑賞しました。例えば、あるドイツ人の少女の作品では、ベルリンの壁とサッカーをテーマにして、手前には芝生と自身のスパイクを飾り、壁を挟んだ向こう側には戦車のオブジェを置くことで、私なりの解釈ですが「自由と圧迫」ということが表現されていました。ワークショップの内容は移民社会を形成する上でドイツにとって大きな意味があり、大変素晴らしいものです。しかし、それ以上にこのワークショップに関して私にとって印象的だったことが、博物館学芸員が携わっていたことでした。劇の前にワークショップの意義を説明してくれたのですが、その方は先日私たちがドイツ歴史博物館を訪れた際に案内をしてくれた方、その人だったのです。私は大学で生涯教育を勉強する機会も多く、その中で学芸員や図書館司書が教育にどう関わることができるかということを考えることがあります。この点でも、このワークショップは私に多くのヒントを与えてくれるものでした。

そして、ワークショップの見学の後は、各々のホストファミリーのもとへ戻り、週末を過ごすことになります。皆、元気でな!!Viel Spaß und Tschüss bis Montag!!

Mein Engel, helfen Sie mir bitte!!!　　8月28日　～11日目～

柳　澄美

朝8時、ホームステイ先のファミリーに別れを告げてA&O Berlin Mitteのホステルに9時半集合目指してパートナーと向かいます。もっとも私の場合は前日にアレクサンダー広場でパスポートを盗まれるというドジをやらかしてしまったために、大使館へ朝一に行かねばならなかったので1人だけ朝９時集合でした。

みんなはホステルに集合したのちWerk9へ向かい、通訳の陽子さんとホームステイの体験談、シュッツエンゲル（Schutzengel）の発表を行います。私はポリスレポートも戸籍謄本のpdfも証明写真も前日に準備していたので渡航券の再発行にそんなに時間はかからないだろうと踏んでいたら、未成年だから親の委任状が必要とかで結局1時間弱かかってしまいました。急いでタクシーに乗ってWerk9へ向かいました。

Werk9へ向かうとホームステイの体験談を終えてシュッツエンゲルの発表へ移っているところでした。プログラム参加者の浩美さんは通訳の陽子さんから買うように言われていた2ユーロほどのプレゼントを、自分が守っていた女の子に渡すと勘違いしていたようで、結果としてプログラム参加者の皓がマニュキュアをもらっていました。

シュッツエンゲルの発表が終わったら２時まで自由時間です。2時間ほどあったので、私は由佳、孝行、瑠里花、皓と一緒に近くのハンバーガー屋さんへ行きました。（めちゃくちゃ美味しかった！）私はその日に行われるさよならパーティーでスライドショー担当だったのでWerk9へ戻ると早速準備に取り掛かりました。他に、皓は学校で合唱部の部長ということで音楽担当、浩平さんはクイズ担当でした。その日は浩美さんの20歳の誕生日だったので真由さんと澄さんは誕生日プレゼントを買いに出かけていました。そんなこんなであっという間に時間が過ぎ、いよいよさよならパーティー開演の6時になろうとしていました。ところがここで問題発生です。浩平さんが作っていた動画つきクイズはパワーポイントでしか開けられず、私の持っていたマックではパワーポイントは有料なのでインストールできないということです。仕方なしに動画の部分は諦めざるを得ませんでした。

Unsre Danke für Alles　　さよならパーティー

樋口浩平

今日は待ちに待ったような、本当は来てほしくなかったような、お別れパーティーの日です。午前中はわいわいと過ごし、午後は来たる時間にむけて、各自でひたすら準備です。合唱、PPAP、クイズ、スライドなど、やることなすこと一杯一杯。沢山の感謝をドイツ人のみんなに伝えるために一生懸命取り組みました。クオリティーを求めたため、熱中してしまい、あっという間に時間が過ぎました。

実は、パーティーが始まる前に 1 つのサプライズがありました。8 月 28 日は大野さんの誕生日だったので、みんなでバースデイソングを歌い、大野さんの 20 歳を祝ってワインで乾杯しました。

そして、いよいよパーティスタート。I have a pen の PPAP から始まりました。鵜飼君がピコ太郎に成りきり、会場を沸かせてくれました。ドイツでも PPAP は有名だったらしく、大好評。幕引きには、まさかのアンコールまであり、みんなで楽しく踊りました。次に、合唱をしました。吉野君が伴奏、他のメンバーでボーカルとなって「残酷な天使のテーゼ」、「Let it go」、「さんぽ」「となりのトトロ」を歌いました。どの曲も盛り上がりましたが、トトロはドイツのみんなもサビを知っており、大合唱となりました。

さらに、クイズ大会をしました。日本とドイツについての○×問題をしました。勝ち残り形式にして、勝者 13 名に日本の 100 円ショップの商品をランダムでプレゼントするという企画でした。思ったよりも、みんな勝負に勝ちにいき、楽しんでもらえました。一番景品を喜んでくれたのが、通訳の陽子さんだったので驚きました。

最後に、参加者の柳さんが作ったスライドショーを流しました。この 12 日間の記憶が蘇りました。始めは、英語を話すことに抵抗を感じたり、コミュニケーションに不安を覚えたりしました。青少年交流に慣れてきて、英語を話す楽しさ、食文化、生活習慣の違い、ホームステイなど楽しいことが沢山ありました。そんな毎日を振り返り、「楽しかったなぁ、もっとこのメンバーで過ごしていたい」と思えば思うほど、悲しくなっていきました。

その後は、約 2 週間お世話になったミッテ区職員のオリバー、アニャ、陽子さんなどに

壇上に上がっていただき、サプライズでお花などのプレゼントを渡しました。特に陽子さんはわざわざお住いのあるパリから来ていただき、朝から晩までずっと通訳をしていただいたので浩美さんを中心として、みんなでお礼の色紙を作りプレゼントしました。そして、１人１人がホストファミリーのバディをステージに呼んで、財団職員の澄さんが用意して下さったプレゼントを手渡していきました。最後にお別れのハグをしてパーティーは終わりました。ホストファミリーと各自で写真を撮り、最後の談笑をして別れました。何人かは空港に来てくれるということでした。　そこで３月にまた再会することを約束しました。早く３月にならないかなぁ。

Auf Wiedersehen, Berlin!!　　8 月 29 日（火）、30 日（水）　～最終日～

工藤　真由

ついにベルリンでの生活も最終日となりました。ホステルを 9 時半にチェックアウトして、車でテーゲル空港に送ってもらいました。空港にはミッテ区職員のオリバー（Oliver）やノーベルト（Nobert）、アニャ（Anja）をはじめとして、ドイツの青少年も何名か見送りに来てくれました。通訳の陽子さんやお世話になったドイツの皆さんとハグを交わし、お別れの時間を過ごしました。私たちが見えなくなるまで手を振って下さったみなさんに、感謝の気持ちと寂しい気持ちを抱きながら私たちも手を振りました。

帰りはベルリンに来た時と同じように、ミュンヘン空港を経由して羽田空港に向かいました。ミュンヘン空港や機内ではそれぞれ食事を摂ったり映画を見たりしながら時間を過ごしました。

30 日の 11 時ごろ、羽田空港に到着しました。荷物をそれぞれ受け取り、集合写真を撮りました。そして出発から解散まで一緒に行動した財団職員の澄さんや団長から一言ずつお話をもらって、解散になりました。

出発前はあまりお互いのことを知らなかった 12 人でしたが、この 2 週間でとても仲良くなることが出来ました。みなさんお疲れさまでした、そしてありがとうございまし

ホームステイ：兄弟　　鵜飼　孝行

私はソン（Son）家にお世話になりました。しかし、ご両親はアパートの 1 階に住んでおり、ホストブラザーであるヤスパー（Jasper）が兄のエミリオ（Emilio）と一緒に同じアパートの別部屋に住んでおり、そこでお世話になりました。初日はヤスパーと、このプログラムに参加している日本人の吉野くんと彼のホストブラザーのティル（Till）と一緒にトランポリンをやりました。日本ではやったこともなかったですし、小さい子供たちが多く、大丈夫なのかという気持ちもありましたが、良い意味で期待を裏切られました。

その日の夜はヤスパーがよく友達と行くというアフリカ料理店でご飯を食べました。アフリカ料理など当然食べたことなかったので、ワクワクしていましたが、日本では食べたことのない特殊な味で、美味しかったです。2 日目はヤスパーの兄であるエミリオのサッカーの練習試合を見にいきました。私もサッカーは大好きなので楽しく観戦させてもらいました。結果、エミリオは 2 アシスト 1 ゴールの大活躍でチームも 6 対 2 で快勝しました。自分のことのように嬉しかったです。その夜は彼らのお気に入りの場所で、色んなことを語り合いました。そのお気に入りの場所というのは取り壊される予定というベルリンの壁の上でした。日本ではなかなか出来ない経験であると共に、とても楽しい夜を過ごすことが出来ました。彼らと自分は気が合っていたので、彼らといると何でも楽しかったです。彼らとは今も SNS 上で繋がっていて、ヤスパーは日本に来ると言っていたので、今度は自分がホストファミリーとしてもてなしてあげたいと思いました。本当の兄弟のようでした。じゃあ、また会おう Brother！

Berlin を通じて：人と人の支えあい

私は留学経験もありますし、海外でのホームステイも何回か行ったことがあるのでこういう類のものは慣れているという認識が心の中にはありました。しかし、こんなにも密な 2 週間になるとは思いませんでした。ドイツの青少年たちと交流していく中で、この世界、社会で生きて行くうえで一番大切なことを学べた気がします。人と人が話し合い、感じあい、コミュニケーションを取るのは、言語の壁も当然ありますが、非常に楽しいですし、素晴らしいものだと思いました。このプログラムは、楽しむことが出来るプランになっています。この「ベルリン市ミッテ区との青少年交流派遣」プロジェクトのために動いて頂いた方には感謝しかありません。日本人やドイツ人の青少年たち、新宿区やミッテ区の職員の方、通訳の陽子さんやホストファミリー、ホステルやゴルミッツの管理人など数え切れないほど多くの人たちにお世話になりました。今回お世話になったドイツの青少年たちが日本に来ると聞いています。是非ともホストファミリーの受け入れをさせて頂きたいと思いました。それくらい自分にとってかけがえのない時間を過ごさせて頂きました。皆、ありがとう！

ホームステイ：自然を求めて　　大野　浩美

私のホストファミリーは、25 歳のセレン（Selen）でした。ホームステイ先はセレンのシェアハウスで、丁度引っ越してしまったハウスメートの部屋を使わせてもらいました。ハウスメートは、ジョークの好きなヤノス（Janos）、背が高く優しいヨナス（Jonas）、美人で明るいミミ（Mimi）の３人でした。

土曜日は、セレンが翌日に控えているアルティメットの試合の練習に行くため、セレンのお母さんとその友だちと共に Zoo Berlin という動物園に行きました。動物園に入ってまず、その大きさに驚きました。ハウスメートが、ヨーロッパで一番大きいと言っておりましたが、その通りだと思いました。ゾウやサル、ゴリラなど沢山の動物たちがいましたが、日本で見るのとは種類が違うように思えました。ゴリラが食事をしている様子をカメラで綺麗に撮れたので嬉しかったです。この動物園で一番人気なのはパンダのようでした。中国から 2 頭のパンダが贈られたのです。パンダのコーナーでは多くの人が行列を作っており、パンダは世界中の人に愛されているのだと感じました。この日は、同行者が主にドイツ語で会話するためコミュニケーションが難しく感じてしまいましたが、動物園の後に合流したセレンに相談することができ安心しました。夕食をとった後、セレンと壁を見にイーストサイドギャラリーへ行きました。壁はとても長く、多くのアートを見ることができ、感じるものがありました。

日曜日はセレンの試合当日でした。セレンのお母さんと 2 人で, ポツダムへ行きました。電車に乗っているうちから、外にかわいらしい家が見え、これが私の想像するドイツだと感じました。ポツダムは「美しい」の一言に尽きます。風車や庭が見え、あらゆるところでワイン用のブドウが育てられていました。特に印象深いのは、サンスーシ宮殿です。日本語ガイドと共に中を巡り、華やかさに目をみはりました。フリードリヒ２世の偉大さがわかるツアーでした。サンスーシ宮殿の後は、ポツダムのエリアを一周しました。沢山歩きましたが、風景が綺麗だったので疲れませんでした。イタリア風、フランス風、中国風の建物があり、フリードリヒ２世は外の文化を取り入れるのを好んでいたのだろうと感じました。楽しく過ごすことができ、良かったです。

翌日の月曜日は私の 20 歳の誕生日でした。朝キッチンに行くとセレンがケーキの準備をしてくれていました。私の好きなキャラクターのケーキと紙ナプキンが机にあり，とても嬉しかったです。その後キッチンにヤノスと泊まっていた女性と男性がやってきて、みんなで歌を歌ってくれました。ホームステイが終わるのは寂しいですが、朝から幸せな気分になりました。ホームステイ先がシェアハウスというのは珍しいと思いますが、若いドイツ人の方々と生活することができ、良い経験になりました。

Berlin を通じて：新たな出会い

今回の旅の目標は、現地の人とコミュニケーションをとることと、英語力の向上でした。青少年との交流は、楽しみでもあり不安でもありました。しかし、ドイツの青少年たちが優しく積極的に話しかけてくれたおかげで、不安は吹き飛びました。プログラムの中では青少年と関わる場面が多く、楽しくコミュニケーションをとることができました。青少年交流やホームステイにおいて、英語を使うことに対しての不安もありましたが、ゆっくり話してくれたのでとても助かりました。

ベルリンへの印象は、行く前と行った後では大きく変わりました。古くかわいらしい建物が多いのかと思っていましたが、ベルリンはずっと発展しており、そこに戦争や壁の痕を感じました。現地の人の話を直接聞き、ドイツの歴史を感じることができ良かったです。

この旅で一番心に残っているのは、さよならパーティーです。青少年のみんな、新宿区、さらにミッテ区から誕生日のお祝いをして頂けたことがとても嬉しかったです。初めてのワインはとても苦かったですが、これも大人への一歩です。忘れられない 20 歳の誕生日です。サプライズパーティー、ありがとうございました！このドイツでの旅では、日本人側もドイツ人側もメンバーに恵まれ、楽しく充実した毎日を過ごすことができました。通訳だけでなく様々な知識を伝授して下さった陽子さんもありがとうございました。ドイツ人受け入れの際にまたみんなと関われるのを楽しみにしています。ありがとうございました。

ホームステイ：日常を感じる滞在　　工藤　真由

私は 26 歳のパウラ（Paula）の家にホームステイしました。パウラはフンボルト大学の学生で、大学に通う傍らでスーパーのアルバイトをし、ギターとしてバンド活動も行っているという、とてもアクティブな人です。彼女は家族とではなく 3 人の友達とシェアハウスをしていたので、私はその 1 部屋にお邪魔させていただきました。

初日の夕方は、ゴルミッツから帰ってきた私たちをホームステイ先の皆さんがホステルに迎えに来てくれました。バイトに勉強にと忙しいパウラはこの日で会うのがまだ 2 回目でしたが、帰り道の電車や Tram（路面電車）内で色々な話をしてくれたり、私のスーツケースを代わりに運んでくれたりとすごく親切にしてくださったので、緊張がすぐに解けました。この日は帰りにスーパーに寄って、夕食用にパウラと 2 人で料理をしました。2 人ともあまり料理が得意ではなかったので、パウラが友達に教わったレシピを見ながら試行錯誤し、ついにジャガイモのグラタンが完成しました。作り終えたころには既に 8 時頃でしたが、私の部屋に付いているバルコニーで夕食を食べてゆっくり過ごしました。

2 日目の金曜日は直接家には帰らず、Werk9 からマウアーパルク（Mauerpark）まで電車で移動し、そこからパウラの友達と一緒に 3 人でベルリン市内を観光しました。最初に夕食をとることになり、私が「パスタを食べたい」と言うと、色々なパスタの種類があるお店に連れて行ってくれました。街が見渡せるバルコニー席で、私はニョッキを食べました。日本では少しパスタは固めに茹で上げることが多いと思いますが、ドイツで食べたパスタは全部すごくやわらかかったので少し驚きました。

ご飯の後には、皆が楽しそうに過ごしている街を眺めながらシュプレー川の川沿いを歩きました。花金のような言葉はないものの、ドイツでも金曜日～週末にかけては楽しい曜日のようで、金曜日には夜中でも電車が動いているそうです。川沿いにある公園の広場はちょっとしたダンスパーティーのようなものが行われていて、ライトアップもされてとても綺麗でした。また、ドゥスマン（Dussmann）という大きな本屋さんにも行きました。日本にあるジュンク堂書店のような本屋さんです。ドゥスマンには、本だけではなく子供用のおもちゃだったり、お土産（ちょっと割高ではあります笑）だったりも売っていて、何時間でもいられそうでした。そのあと、公園の近くにあるバーに入り、夕方から行動を共にしてくれたパウラの友達とお別れをして帰途につきました。

土曜日には、朝食を食べたあと買い物に連れて行ってもらいました。まず私たちはアレクサンダー広場（Alexanderplatz）に向かったのですが、広場ではバンドが演奏を行っていたり、ケバブやアイスなど様々な屋台が出ていたりして、お祭りが行われているようでした。私はそのうちの 1 つの屋台で、パウラがおすすめしてくれたピーナッツソースのケバブを食べました。4 日目に食べたケバブとは味や見た目が全然違いましたが、ピーナッツソースがすごく効いていてとても美味しかったです。おやつのケバブを食べた後、アレクサ（Alexa）というモールに入りました。そのほかにも観光名所であるハッケンシャーホーフ（Hackenscher Hof）の中にあるアンペルマンショップやお土産ショップなどにも行き買い物をしました。

深夜には、12 時ごろから上映するというサイレントムービーを見に行きました。まず上映が無料だということに驚き、深夜にも関わらずたくさんの人が集まっているのにも驚きました。このサイレントムービーは、BGM はその場でオルガンが演奏され、セリフや説明がドイツ語字幕で少し流れる、という形式でした。当然ドイツ語は全く理解できなかったのですが、パウラが英語で訳してくれて大体の内容は理解することが出来ました。すごく面白かったです！ちなみに内容は、暴力的な女性とアルコール中毒の男性が繰り広げるコメディでした(笑)。

日曜日は、まずパウラの家の近くにあるシュラハテンゼー（Schlachtensee）という湖を散歩しました。湖はそこまで大きくはないですが、周りが公園のようになっていてジョギングをしている人やピクニックをしている人もいました。中には水着で泳いでいる人もいて、肌寒いくらいなのにと少しパウラも驚いていました。また、湖のほとりの一角にはビーチのようになっているところもあり、そこだけ白い砂やヤシの木が植えてあったりして南国のような雰囲気が漂っていました。

その後パウラの彼氏と合流し、マウアーパルクで行われているフローメルクテ（Flohmärkte：日本でいうフリーマーケットのようなものです）に行きました。公園内にはストリートミュージシャンがいたり、食べ物の屋台、雑貨など様々なお店があったりして沢山の人で賑わっていました。右の写真は公園の中で開かれていたカラオケ大会を

写したもので、一般の方が申し出て歌っていたようです。とても人気があるようで、人が多く集まっており観客の盛り上がりもすごかったです。日本のカラオケとは一味違うなあと新しいカラオケの形を見たようでした。

夕方からはシュプレー川を下る船に乗りながら観光を楽しみました。ベルリンに来てから初めの何日かはあまり天気が良くなかったのですが、この日は天気が良く、川から見る市内は地上から見ていたのとはまた違った趣がありました。歩いて移動していたら絶対に見て回れなかったであろう歴史的な建物や観光名所を見ることができて楽しかったです。特に私が感動したのはイーストサイドギャラリーを川側から見られたことです。1 つ残念だったことは、夕方から夜にかけて気温が下がり、途中から寒すぎて景色に集中できなかったことです…。寒さに凍えはしましたが、ベルリンの街がきれいにライトアップされた夜にこの船に乗れてよかったです。それから船旅が終わり、家に帰ってからパウラが寒いでしょうと言って私のためにお風呂を入れてくれました。

たった数日間ではありましたが、Paula のおかげで充実した時間を過ごすことができました。様々な経験をさせてくれた Paula と、Paula の周りの方々にとても感謝しています。

Berlin を通じて：自分の目で見るドイツ

この 2 週間の滞在の間、常に新しい驚きと感動を得ることが出来ました。今の時代であれば、今回見た歴史的な建造物やその背景などはインターネットできっと見つけることができると思います。しかし、実際にその場所を訪れてこのような機会がなければ知りえなかったことを沢山学ぶことが出来ましたし、現地の同年代の若者たちと会話を交わし議論ができたことはかけがえのない経験になりました。最後になりますが、このプログラムに関わって下さったすべての方にお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました！

ホームステイ：広くて深い体験を　　**坂田　惟仁**

私のホストファミリーはティナ（Tina）と旦那さんのステファーの 2 人家族でした。2 人ともとても良くしてくれました。私はホームステイが初めてだったのでどうしたらいいのか不安でしたが、2 人とも本当に優しかったです。私が泊まったのは 4 泊中 2 泊で、そのあとは他のマリオとアレックス夫妻の家に泊まりました。料理を作るのはステファーの役割でいつも美味しいドイツ料理を作ってくれました。私もマッシュポテト作りを手伝いました。ティナは自転車を貸してくれて一緒に湖に行きました。そこでは、ボートに乗ってたくさん写真を撮ったり、お喋りをしたりしました。ドイツの自転車はサドルが高くて信号で止まるときが怖かったです。夜は、ドイツの伝統的なゲームをしました。MIKADO というゲームでは「本当にやったことないの！？」って言われるくらい初めてのゲームで勝てたのが嬉しかったです(笑)。

　土曜日は、リクエストしていたドレスデン（Dresden）に連れて行ってもらいました。マリオ夫妻も一緒に行きました。ベルリンから車で 2 時間 30 分もかかるところに連れて行ってもらえるとは思っていなかったので、とても楽しみにしていました。Dresden では、古い教会や城を観光バスに乗ってまわりました。観光バスは日本語の通訳があったので良くわかりました。ドレスデンは綺麗な街でした。狭い範囲にたくさんの歴史的建造物がありました。ドレスデンという街は第二次世界大戦や洪水で度々重要な建物が壊れているそうですが、その度に復興しているそうです。私は防災や復興について興味があったので、勉強になりました。災害が起こるたびに地域の人たちと協力して復興するのは日本と同じであるように感じました。さらに、教会などは一度崩れた瓦礫から作り直していると聞きました。その中有名な教会が聖フラウエン教会で、白が印象的な建物です。内装も白く天井がとても高かったです。しかし、外側から見ると黒い石もあるのがわかりました。それは、戦前に使われていた

古い石だということでした。ドレスデンを離れてから、ザクセンスイス国立公園に連れて行ってもらいました。そこは景色が綺麗でした。

夕食は、近くの小さな町で食べました。小さな町ですが、たくさんの人がいて賑やかでした。そこでは、アレックスに街は教会の周りにできると教えてもらいました。私はその時に日本の城下町と似ていると感じました。

日曜日は、マリオ夫妻がベルリン市内を連れて行ってくれました。午前中はゆっくり家で映画を見てから、午後は船に乗って川の上からベルリンの街を見ました。ベルリンに来てから観光バスで回った景色とは違って裏側から見られたような気がしました。その後、シャルロッテンブルク宮殿（Schloss Charlottenburg）に連れて行ってもらいました。観光バスで来た時も見ましたが、その時は時間がなくゆっくり見たいと思ったからです。宮殿の裏は庭になっていて、たくさんの人が休日をゆっくり過ごしていました。

私も休日をゆっくり過ごすことができました。ティナやステファー、マリオ夫妻に感謝です。

Berlin を通じて：学んで感じ取ったこと

私は、ドイツについて行くまではニュースや学校の授業で習う程度の知識しか持っていませんでした。さらに、英語もたくさん喋ることができるわけではなかったので、交流にもたくさんの不安がありました。しかし、周りの人たちがずっと話しかけてくれて、緊張も解け楽しかったです。周りの青少年は積極的に交流をしていたので、自分も刺激を受けてホームステイの時はたくさん話をすることができました。ドイツの青少年は日本の文化に興味を持ってくれて話題がつきませんでした。文化を学ぶだけではなくて、文化を教えることも楽しめた派遣でした。

今回の派遣で、私はドイツの街並みをたくさん見たいと思って参加しました。十分なくらい見ることもできて満足しましたが、それ以上に、今までで 1 番濃い 13 日をすごすことができました。青少年派遣に関わることができて、幸せでした。ありがとうござい

ホームステイ：卓球と男料理と加古隆と　　中田晃仁

私を受け入れてくれたホストファミリーは、同じく大学生のニクラス（Niklas、以下ニック）とその父のウーヴェ（Uwe）というルーフェナッハ（Rufenach）親子でした。なんと実は、ニックは大の日本好きで、日本語もぺらぺらです。話を聞くと、インターネットで 4 年間勉強をし、前学期に大学の授業を受けた結果、これだけ話せるようになったということでした。ここで面白かったのは、インターネットでは日本のバラエティ番組が一番いい教材だったということです。というのも、日本のバラエティではよく出演者のコメントに字幕がつきます。音声を交えて語学を勉強する時の 1 つの障害として、何を言っているかが分からないということがあります。実際にドイツの番組には字幕は基本的に存在しません。その点で、日本のバラエティ番組は見事に学習の障害を克服したものでしょう。しかも、感情によって字体や文字の色も変化するというおまけつき。意外なところで、日本とドイツの違いを感じました。

さて、ホームステイの 1 日目の夜は近くのアラブ料理でファラフェルを食した後、一緒に行動していた樋口君、彼のホストであるマーヴィン（Marvin）、ニックと私の 4 人で家の目の前にある卓球台で卓球をしました。ドイツには、割と普通らしいのですが、道端や公園に卓球台（台もネットも鉄製）があります。夕方になると、地元の住民がちょこちょこ集まって、それぞれ思うままに卓球を楽しむという話を聞きました。全く知らない人とすることもあるそうです。実際、樋口君が地元のロシア人（？）と試合をしていました。ウーヴェはよく地元の仲間とサッカーをするようで、ドイツではスポーツによる地域コミュニティの形成が盛んなんだなと感じました。樋口君らと別れた後は、ニックの家に戻り、私が教育学部ということもあってドイツの教育事情について少し話しました。日本で身に付けた知識と現実は少し異なるようで大変驚きました。

2 日目の夜は、私の提案により、また同じメンバーでニックの家で料理を作ることにしました。ということで、Werk9 の近くにあるドイツでも 1、2 位を争うスーパーであるレーヴェ（REWE）で買い出しです。すると、なんということでしょう。そこには、フェーダーヴァイサー（Federweißer）があったのです。フェーダーヴァ

イサーとは、発酵中の新ワインのことで、本来は11月ぐらいにお目見えするものなのですが、なぜかスーパーに置いてあったのです。私とマーヴィンは驚きと興奮を隠せず、買うことを即決。その後、スーパーを色々見て回った結果、日本人組は焼きそばを、ドイツ人組はシュニッツェル（Schnitzel：薄いカツ）を準備することにしました。男 4 人組だと駄目ですね。「男の料理」と銘打ってとにかく荒々しい調理になりました(笑)。でも、味は抜群で、ニックとマーヴィンも満足してくれたみたいで良かったです。見ていて気付いたのですが、ルーフェナッハ家は基本的に食器用洗剤を使いません。環境に対する意識の高さが伺えます。

3 日目は、私の希望で午前中に CD を買いにアレクサンダー広場まで行きました。ニックに聞くと、ドイツには大手の CD ショップが無く、CD は家電量販店で買うのが主流なのだそうです。ということで、アレクサンダー広場の 2 つの大手家電量販店を訪れたのですが、私が欲しかったあるドイツのバンドの CD が全くなく、正直驚愕しました。そのバンドはドイツでは決してマイナーな存在ではなく、むしろ有名なのですが、2 つ店を巡ってどちらもない。これはもう事件です。日本とドイツの違いですね。

その後、ドイツ歴史博物館をもう一度見学し、博物館島で由佳、澄美と由佳のホストであるリナ（Lina）と待ち合わせをしてベルリン大聖堂へ向かいました。大聖堂の中に入った瞬間、その荘厳な内装に圧倒されました。そして、ジャンピングハウスというトランポリンのレジャー施設で遊んだ後、マウアーパルク（Mauerpark）と呼ばれる若者が多く集まる公園で他の青少年達と小さなパーティーをすることのなったのですが、私はここまでに蓄積された疲労がピークに達し、ダウン。先に帰らせてもらうことになりました。ここでもドイツと日本の違いが出ます。日本の場合、ノリが悪いと揶揄されてしまうかもしれない状況ですが、ドイツではそのようなことは全くありません。つまり、場の雰囲気よりも、個人の意思を取り敢えず尊重してくれるのです。

ホームステイ最終日の 4 日目は、朝から大忙しです。というのも、この日はベルリンから出てポツダムへ向かうからです。ポツダムといえば、サンスーシ宮殿（Schloss Sanssouci）

ですが、有無を言わせぬ観光名所なので朝一番に行って入場券を買わなければなりません。ちなみに、この日は樋口君、マーヴィンとさらにマーヴィンのおばあさんと一緒です。私達だけでなく他の青少年も訪れていたそうですが、私が最も感動したのはフリードリヒ大王の書斎です。彼は背が低かったので、本棚の高さに制限があったのですが、その制限ギリギリ一杯に本が詰められておりました。しかも、その部屋は宮殿の中でも最も奥まった場所にあり、彼が読書を誰にも邪魔されたくないほど重要なものと考えたのかなと図書館司書課程を履修している身として嬉しく感じました。サンスーシ宮殿周辺を一通り散策した後、プログラム参加者の翔子、翔子のホストであるリリット（Lilith）とそのお母さんと合流し、次の目的地であるツェツィーリエンホーフ宮殿（Schloss Cecilienhof）へと向かいます。ここは、日本にとって特に重要な意味を持った場所です。というのも、ここで 1945 年にあのポツダム会談が開かれていたのです。外観はハーフティンバー様式を彷彿させるような親しみやすい感じでした。しかし、中はさすが宮殿とだけあって豪勢で、特に会談が実際に行われていた大広間は必見です。ここで日本への無条件降伏宣言案が話し合われていたんだなと想像すると本当に不思議な気分になりました。その時、私の脳内で加古隆さんの「パリは燃えているか」が再生されていたことは言うまでもありません。ツェツィーリエンホーフ宮殿を後にした私達は、一路ベルリンへ戻ります。青少年だけでご飯をベルリンの日本食を食べに行こうという話になりました。しかし、残念ながらここは日曜のベルリン。どこの日本食料理店も定休日でした。まあ、日本食は来春に持ち越しということでいいんじゃないですか(笑)。

Berlin を通じて：異文化と手を繋ぐ時代に生きること

私がこの青少年交流派遣に参加した最大の目的は、ドイツとヨーロッパ圏高位共同体である EU の関わりを実際の目で見て考えることでした。2017 年 9 月 24 日、ドイツでは連邦議会選挙が行われましたが、EU に関係する問題が一番の選挙争点だと言っても過言ではありません。選挙の結果、EU に懐疑的な考え方を掲げる超保守政党の AfD が初めて国政に進出することとなりました。

ベルリン滞在中にもこの政党のポスターをよく見かけました。彼らの主張は、EU 懐疑論・反イスラーム・ドイツ第一主義が中心です。例えば、ある街頭に貼られた選挙用ポスターには、「Burka? Ich steh mehr auf Burgunder!」と書かれています。ブルカとは、イスラームの女性が身に付ける衣装の 1 つで、ブルグンダーはブルゴーニュのドイツ語表記です。「ブルカ」よりも「ブルグンダー」を、それが彼らの主張なのです。また、ポスターには、この文言と共にドイツの民族衣装に身を包み、ワインを手にした 3 人の女性が写っています。ここにも、この政党の保守的な性格を窺い知ることができます。

これまでは、移民排斥やドイツ第一主義を表で意見することは難しかったでしょう。なぜなら、ネオナチだと認識され、周囲から白い眼を向けられるからです。しかし、このポスターが示すように反イスラームや反移民が公然と今では主張されるようになりました。この社会変化の背後には、やはり EU が関係していると思います。より具体的に言うと、EU が平和の象徴であるという絶対視に綻びが生じている結果として、現状があるのではないかと思うのです。

そもそも EU は、第二次世界大戦の反省として、ヨーロッパで二度と悲惨な戦火を引き起こさないようにしようという希望の下で発展してきました。その手段として、経済・軍事・民主主義の三本柱の統合を推進します。今までは統合によってヨーロッパに平和がもたらされると信じられてきたのです。しかし、先にも述べた移民問題や金融問題あるいはテロ事件を通じて一部の人々の眼差しは疑いの色を含むようになりました。つまり、それは過去の反省や歴史にすら疑いを向けることに繋がってしまいます。すると、今まで禁忌視されてきた排他的発言が反動のように表に出やすくなります。その表に出た意見の 1 つがあのポスターではないでしょうか。ある 1 枚のポスターから、EU に対する人々の心の変化に触れた瞬間でした。

一方、ドイツはやはり EU から多くの恩恵を主に経済面で受けていると感じました。そ

う感じた背景には 2 つの体験があります。まず、スーパーの品物の多くを国外に依存していることです。ホームステイの体験談でフェーダーヴァイサーを紹介しましたが、実はイタリア産です。また、ドイツのスーパーでもお米を販売しているのですが、それも多くがイタリア産でした。肉類はさすが本場という感じで国内産が主流でしたが、全体的にみると、やはり国外産の存在を強く感じました。2 つ目に、ポーランドの大型トラックを多く見かけたことです。ゴルミッツへ行く際、私達は高速道路（Autobahn）を利用しました。ヨーロッパでは、車のナンバープレートを見ると、一目でその車がどの国に属しているかが分かります。車での移動中、抜き去る車を何気なしに見ていると、「P」のナンバーを付けた大型トラックをよく見かけました。「P」は文字通りポーランドの「P」です。何を運んでいるかは分かりませんが、むしろ重要なことはそのトラックがポーランド（の会社）に属していることです。なぜなら、それはトラックの運転手がポーランド人であることを意味するからです。ポーランドとドイツの人件費でどちらが安いかと問われれば、一般的に考えてポーランドの方が安く済みます。同じ輸送経路があるとして、人件費に差がある場合に企業はどのように選択するでしょうか。おそらく十中八九は人件費の安い方法を選ぶでしょう。

EU 内では物の往来も人の往来も基本的に自由に行われております。ドイツは EU の中でも頭一つ飛び抜けた先進国であり経済大国ですので、生産を行うのに周辺国と比較してコストがかかります。すると、ドイツの各企業は自然と人件費や原材料費が安い周辺国で生産を行うようになります。それは偏に日本の企業が中国や東南アジア諸国で生産し、日本へ逆輸入することと同じ現象です。しかも、日本の貿易と異なり関税が無いので、その影響力は尚更のことと考えられます。

スーパーマーケットに象徴される「物」の依存、大型トラックに象徴される「人」の繋がり、ドイツ経済はもはや EU 無しでは語ることができないのです。

さて、ここで一旦寄り道して、異文化理解について考えてみましょう。多文化教育論の中に、「経済的多文化主義」という言葉があります。経済的多文化主義とは、自由主義経済を背景にして自国の利益を増幅させるために外国人をある種の経済資本と見なして積極的に受け入れる多文化主義理論のことです。

ドイツは戦後の高度経済成長期に労働者が不足していました。そのため、1955 年あたりからトルコやイタリアから多くの移民を受け入れます。その際、多くの移民労働者が移り住んだと言われているのが、4 日目に訪れたヴェディング地区です。当初の予定では、経済成長が安定した段階で彼らを帰国させるつもりでした。しかし、その意に反して多くの移民がドイツでの生活に慣れ、祖国から家族を呼び寄せて定住しました。現在、ベルリンの至る所にケバブ屋やピザ屋あるいはジェラート屋が見受けられますが、それはトルコやイタリアからドイツへ移り住んだ人々が開き、受け継いできたものです。帰国しないのなら

ばということで、政府は同化政策、つまりドイツ人として人生を歩んでもらうようにする政策を推進しました。この段階に来ると、多文化主義政策の基軸は経済なんかではなく、文化あるいは行動様式に移行します。

7 日目、ゴルミッツで過ごした午前中に私達は「異文化理解」とは何かを考える小さなワークショップを行いました。4 つのグループに分かれて、サイコロを振るゲームをするのですが、各グループには固有のルールが存在します。グループのメンバーは不定期に別のグループへ移動するのですが、これがある種の「異文化との出会い」になります。ワークショップを通じて、移ってきた人々（移民）がルールに順応する場合としない場合があることが確認できました。簡単に順応する場合は特に気にすることは無いでしょう。問題は、グループのルールに上手く順応しない場合です。

ゲームのルールは、現実世界に置き換えると、法律や習慣と考えることができます。例えば、習慣の話で言えば、日本人は他人の話を聞く際によく頷きがちです。しかし、通訳の陽子さんの話によれば、ドイツ人はじーっと相手の目を見て聞くことが一般的であり、頻繁に頷くと「はいはい、分かった分かった」と反応しているように相手が受け取ってしまうそうです。このような習慣の違いはあらぬ誤解を生み、延いては異文化摩擦にまで発展させてしまうので、できるだけ避けたいですよね。

ここで、順応の問題に戻るのですが、オリバーがワークショップの後に、2 つの概念を私達に提示してくれました。„Integration“と„Inklusion“です。前者は、いわゆる「同化」と訳されることが多く、教育することによって順応してもらおうという考え方です。後者は、直訳すると「包括」になるのですが、まだ日本で一般的に使われている用語は無いと思われます。オリバーの描いた図によれば、各々の文化を尊重して無理に順応させることはしないという考え方かと思います。先述した例に当てはめると、まず「同化」の場合は、「ドイツでは頷いて聞く習慣はないので矯正しよう」ということになります。そして、「包括」の場合は、「まあ、日本だとこうやって聞くのが普通らしいし、いいか」ということになります。私が観察していたグループでは、まさに「まあ、いいか」という感じで、移ってきたメンバーのルールをそのまま尊重してゲームが続けられていました。

お気付きかと思いますが、実際にある国が移民を受け入れる際には「同化」と「包括」

の両方を駆使しなければなりません。少なくとも、「同化」は絶対です。移民がある国で生活する上で、言語の修得がある種の必要条件となります。他にも、例えば電車の乗り方やゴミの出し方など、その国の習慣や特に法律に関わる部分ではどうしても移民側が当該国の慣習に合わせる必要があります。つまり、どんな状況下にあっても、移住の根底には「同化」があるのだと私は思います。

しかし、「同化」一辺倒で果たして良いのでしょうか。いくら「同化」を促しても、完全な「同化」など正直不可能です。日本人が 30 年、40 年ドイツに定住したとしても、日本的な発想は抜けることは恐らくないでしょう。つまり、「同化」には遅かれ早かれ限界が待ち受けているのです。そこで重要となるのが「包括」の考え方です。移住してきた人々と現住している人々が、お互いの大事にしている文化や習慣を尊重して認め合うことによって、どうしても「同化」によって埋められない距離を限りなく縮めることができるのではないでしょうか。その点で、もしかすると「包括」より「配慮」、「尊敬」あるいは「思いやり」と解釈した方が正しいかもしれません。ただ、お互いの文化や習慣を尊重することはそんな容易なことではありません。当たり前ですね。そもそも知らないのですから。だからこそ、異文化交流や異文化理解教育というものがこのご時世で重要性を増しているのです。

長くなったので、少しまとめてみましょう。ドイツは移民大国で 1950 年代後半からトルコなど様々な地域から移民を受け入れてきました。最初は経済的多文化主義政策でしたが、2 世や 3 世がドイツに定住するようになった現在では、経済に代って文化が基軸となって多文化主義政策が推進されています。移民がドイツ社会に順応するにあたって、「同化」と「包括」という 2 つのアプローチ方法が存在するが、両方を折衷した方法が最も好ましいと考えられます。中でも「包括」は現住している人々が努力しなければいけないという点で重要です。より具体的に述べると、異文化受容力を醸成しなければなりません。この異文化受容力を学校教育や社会教育を通じて身に付けて頂くこと、それが異文化交流や異文化理解教育の今日的な意義なのではないでしょうか。

さあ、EU の話に戻りましょう。ドイツの中で移民排斥や反イスラームの声が俄かに上がり始めていると説明しましたが、私が思うに、彼らはそれこそ「包括」の考え方を見落としてしまっているのではないでしょうか。ヨーロッパ圏の文化と中東圏の文化は決して分かり合うことができないので、離れて暮らしましょう。あるいは、「同化」できない方はお引き取り下さい。それが、彼らの主張です。要するに、

異文化を知ろうとする選択肢を最初から排除してしまっていると考えられます。4 日目にヴェディング地区で私達を案内して頂いたワッティーム（Kujtim）さんとドゥア（Dua）さんは、自らのチームを„Ghettostreber“と名付けていました。„Ghetto“を私なりに解釈すると、「隔離された地区」となります。戦時中には実際にそうだったと予想されますが、隔離された地区の外側と内側では基本的に交流は発生しません。もしかすると、交流を生み出さないこと、言い換えれば拒絶して締め出すことこそが本来的な目的だったのかもしれません。であるならば、自分達が居住しているヴェディング地区を彼らが敢えて„Ghetto”と称していることの背景には大きな問題があります。誤解を恐れずに申せば、まだまだベルリンの中にも異文化交流を否定してしまうようなイメージが残っているということです。

EU はヨーロッパにおける平和を構築せんがために、あらゆる分野において統合を推進し、並行して人的交流も活発になりました。しかし、裏を返すと、それは EU の内と外に境界線を築くという意味にもなります。EU は、ギリシャやローマを起源とし、キリスト教に代表されるヨーロッパ文明を共有した国家によって形成されております。そのため、今まで各国家に帰属していたアイデンティティが少なからず「ヨーロッパ」というより大きな範囲に広がることになるのです。それだけではありません。共有される人数も段違いで増えるので、その団結力はより強固な物になることが予想されます。すると、ヨーロッパ市民と非ヨーロッパ市民という区別が国家的民族どうこうよりも前面に出現します。つまり、異文化というものがより際立った存在として人々の目に映るようになると考えられるのです。

2015 年、ドイツのメルケル首相は 100 万人ものシリア系難民を受け入れることを決定しました。まさに、異文化の大量流入です。これに応じて残念ながら EU 圏内の様々な地域で文化的摩擦のみならずテロ事件の類まで発生してしまいました。すると、移民問題以前にすでに起こっていたギリシャ財政危機問題と相まって、平和的空間としての EU に不協和音が響き始めます。その影響の最たるものがイギリスの EU 離脱に他なりません。結果として、異文化に敏感に反応する人々は次のように考えるようになったのでしょう。EU が全ての元凶であり、もう一度「国家」に立ち戻って、自分達の国であることを保持しなければならないと。

確かに、彼らの主張にはある程度の筋は通っています。しかし、いざ行動に起こそうとしても現実的に考えて大変難しいと思われます。というのも、先述した通り、ドイツと EU は既に切っても切り離せない関係性にまで発展しているからです。また、歴史的に考えても、排除や追放は新しい摩擦を生み出します。であるならば、「包括」的な多文化共生社会を形成する方が良いのではないでしょうか。将来のことは分かりません。「包括」的な多文化共生社会というものが破綻しないとも限りません。ただ、少なくとも現段階では信じても良いと私は思います。なぜなら、„Ghettostreber“のように考え直す余地がまだあるからです。そして何よりも、ヤスパー（Jasper）、リナ（Lina）やティル（Till）のように異文

化的背景を持つ青少年がドイツの将来を担っていくこと、8 日目に見学した難民の青少年とドイツの青少年が交流するワークショップを公の機関が絡みながら開いていることのように、次世代に継続して多文化共生社会を創造する土壌があるので信頼できるのです。その中で、EU の存在をどう捉えるかという問題が残りますが、私としては、やはり EU 創設に向けて尽力した西独元首相アデナウアー（Adenauer）や仏政治家モネ（Monne）が考えた EU の原点を見つめ直して再定義することが肝心であると思います。

最後に、日本はどうでしょうか。残念ながら、日本は経済的多文化主義という範囲を未だに超えることができていないというのが私の見解です。その証拠に、バブル経済期に受け入れてきた日系移民がリーマンショック以降、自分達の祖国へ続々と帰国しました。つまり、日本は定住する環境ではなかったのです。その点で、現代日本はドイツの足元にも及びません。しかし、これからのグローバル社会を迎える中で、今までの考え方を改める必要性に迫られるでしょう。グローバル社会とは、すぐお隣さんが外国に背景を持った人々であるという社会のことです。実際に新宿区では外国人居住者が既に全体の約 10%となっています。彼らが日本社会で快く生きてゆくには日本語の修得を始めとした同化が必要になりますが、それと同時に私達の異文化受容力を教育によって培うことが重要であることをベルリンの旅を通じて学びました。ただ、日本に住んでいるだけでは、このような気付きを得るのはなかなか難しいと私は考えております。ですので、このベルリン青少年交流派遣は数少ない異文化交流あるいは異文化理解教育を与える機会として大きな役割を担うことが期待されます。そして、私はこのプログラムが長く続くことを切に願っております。

本当の最後となりますが、私にこのような貴重な機会を与えて頂いた新宿区と新宿未来財団の職員の皆様、随行して頂いた団長と嘉山さん、ドイツ側で私達を歓迎して頂いたオリバー（Oliver）、ノーベルト（Nobert）、マドレーンとアニャ（Anja）、そして何よりも行動を共にしたホストブラザーのニック（Nik）やミッテ区、新宿区の全ての青少年に感謝して一先ず筆を置かせて頂きます。

Herzlich Dank und egal wie viele Meilen uns teilen sehen wir uns irgendwann wieder...

ホームステイ：心から感謝を　　**樋口浩平**

私にとって今回のホームステイは初めての体験でした。私のホームステイ先はマーヴィン（Marvin）の家でした。家では基本的に 2 人でした。ホームステイ日程は 4 泊でしたが 2 日間は泊まるだけだったので実質一緒に過ごしたのは、2 日間でした。さて、1 日目はお昼ご飯をマーヴィンの母親が肉団子とポテトの白ワインソース和えを昼食に作ってくれました。この料理がドイツで食べた食事の中で一番美味しかったです。ご飯を食べた後は、ポツダム市にある湖で人生初のクルージングをしました。1500 年代にドイツ人が住んでいた孤島や病院として使われていた教会、今は公園となっている城など歴史的なことをガイドの方がたくさん教えてくれました。全てドイツ語解説だったのですが、マーヴィンが英語で通訳してくれて嬉しく、とても楽しめました。

その後、ベルリンでパレードのようなフェスティバルがあったので、フェスの雰囲気を味わいました。おいしい地ビールを飲み、日本には馴染みのないチップの話などで談笑しました。フェスで出店していたアクセサリーの店で、何を買うか決めかねていると、マーヴィンがネックレスを選んでくれてとても嬉しかったです。深夜にはドイツの昔の無声映画を鑑賞したのですが、基本無音で、たまにある字幕が古いドイツ語なので全然わかりませんでした。深夜 3 時に帰宅したのですが、ドイツには終電がなく、定期的に電車が通っているので無事に帰宅できました。これもまたいい思い出。

２日目は、私達２人＋青少年 4 人＋保護者 3 人のメンバーでポツダムにあるサンスーシ宮殿にいきました。フリードリッヒ２世の命令により建てられた宮殿です。「これ以上きれいで壮大かつ繊細な建物はあるのか！？」と思うほどの素晴らしい建物でした。中はそのモチーフにより多種多様でした。例えば、神話に出てくるビーナス、メー

ティスの像や天使の像、休憩室では庭園を意識した様式など。外観も黄色を基調に、像が守る様に配置されていました。また、別の場所に、絵画展ともいえる宗教画が数多く展示している建物があり、心が奪われるほどの美しさでした。私は、あまり芸術に関心はなかったのですが、そんな私でも「死ぬ前には、もう一度行きたい。いや、ここに住みたい。」と思うほど、脳裏に焼き付くほどの感動をずっとずっと味わうことができました。ここに連れてきてくれたマーヴィンに本当に感謝です。

Berlin を通じて：毎日心が躍る日々でした

全てのプログラムが楽しく、毎日が幸せでした。自分の英語が拙く、意思疎通が上手くいかなかったり、文化の違いに驚き戸惑うこともありましたが、毎日が自分の糧となり成長していくのが実感できました。壁を乗り越えて初めて分かる感覚というものに出会える貴重な体験をさせていただき感謝しています。

ホームステイ：不安と期待に包まれて　　星川　優奈

生まれて初めてのホームステイということ、そして事前にメールのやり取りはしたものの実は海外に来るのも初めてだったこと、何もかもが初めてな今回の体験は期待と不安の混ざった複雑な気持ちで挑みました。

私のホストファミリーは、ホストシスターのマリー、ホストマザー、ホストファザー、そしてジラという名前の黒い大型犬の 3 人と 1 匹が住む家でした。初めて家を見た時は、とても驚きました。一軒家とは聞いていましたが、まさか庭にプールがあるとは思っていなかったのです。それに家の中にバスルームが３つ！これがドイツの普通なのかと思いました。翌日他の青少年に聞いた話ですが、どうやら私は運が良かったらしいです。ホストマザーとマリーと一緒に家に向かい、ホストファザーとは家で初対面しました。ホストファザーは英語が話せないので事前学習で学んでいたドイツ語で挨拶をしました。正直名前と年齢、趣味程度しか言えなかったのですが、通じて嬉しかったです。

ホームステイ１日目は自己紹介と家の案内､そしてプレゼントの渡し合いで終わりました。

私は日本のお菓子や文房具を､ホストファミリーからはたくさんのお菓子と可愛い手提げを貰いました。バウムクーヘンも入っていましたが、ドイツではクリスマスに食べるお菓子だそうで､特別に用意してもらえました。

2 日目、中間報告や Werk9 の青少年プロジェクトを見学した後、マリーの家に澄美ちゃん、由佳ちゃん､他の参加者のパートナーのナターシャ、リナと一緒に向かって、お泊まり会をしました。ダンスゲームをしたり、庭のプールに入ったりして楽しみました。夕飯は庭で BBQ。ドイツの夏の夜は寒く、火の近くで暖まりながら話していました。夜遅くまでお喋りしたり、ドイツ風のメイクをして貰ったり。個人差もあるのでしょうがドイツ風のメイクはとても濃くて、皮膚呼吸ができなくなるかと思いました。

3 日目、前日に夜更かしをしたので朝は少し寝坊をしてしまいました。朝食はパンケーキを庭で食べ、午前中に澄美ちゃん、由佳ちゃん、ナターシャ、リナと別れました。お昼に近い朝食だったので、お昼は食べず、マリーとホストマザーとショッピングに行くことにしました。ドイツでは、食べたい時にご飯を食べ、はっきりと朝昼晩の時間は決まっていないそうです。ショッピングでは服や小物、チョコレートを大量に買って散財してしまいました。

夕飯は青少年全員で公園に集まってそれぞれパンやお菓子を買って話しました。ウクレレを弾くのを聞いたり悩み相談をしたり、色々なことをしました。

4 日目は、朝はのんびりと過ごし、午後になってからホストファミリー皆で(正確にはジラを除く)サイクリングに向かいました。自転車に乗っている人は結構多く、サイクリングも良くやっているそうです。途中、川沿いの店でホットドックを食べました。マスタードとケチャップたっぷりで、味が濃すぎるかと思ったのですが、凄く美味しかったです！今まで食べた中で 1 番美味しいホットドックだったかもしれません。ホームステイ最後の夜ということもあって、私が食べたいと言っていたツヴィーベルクーヘン（玉ねぎとベーコンのパイ）を一緒に作りました。作ったことがあるのかと思えば、皆初めて作るらしく、途中失敗もしながらも、どうにか力を合わせて完成することができました。食べたかったこと、そして達成感と皆で作ったこともあって、とても美味しく感じました。

Berlin を通じて：振り返って

この 13 日間、初めは不安に思うことも多かったのですが、実際に体験して振り返ってみると、自分との価値観の違いや文化の違い、逆に同じような文化もあるということを知ることができ、とても楽しい交流でした。美味しい食べ物や綺麗な景色も、写真より現地に行った方がより発見できて、現地の青少年とディスカッションをすることで考え方の相違がより見えてくる。この交流は自分の中で大きな経験となったと思います。また機会があったらではなく、機会を作って行ってみようと思います。

ホームステイ：楽しく行きたいところを制覇しつつ常にディスカッション！
森下　瑠里花

私のホストファミリーは、レーサーのように車を飛ばすけど、料理上手なステファンパパ。たとえ自分がわからない情報でもタブレットを駆使してすぐに教えてくれるニコルママ。マンガやカルピスが好きで、来年旅行で京都に行くトニーお姉ちゃん。ドイツ語しか話さないけれどジェスチャーで伝えてくれる上、私のために安全に帰国できるお守りのようなものと、手作りママレードをくれたローゼおばあちゃん。そして、１週間後に１年間のイギリス留学に行くにもかかわらず、私を受け入れてくれた、いつも私を気にかけてくれる同い年パートナーのカティの家族でした。朝の食卓から景観保護や女性の社会進出の話、車の中では原発やディーゼルカー規制の問題、様々なことを話しました。

ホームステイ初日の夕飯はマーケットで食べました。たまに家族で訪れ、食べ歩きを楽しむそうです。そこには、観光客はほぼおらず、地元の人々で溢れかえっていて、ベルリンの人々の「日常生活」を体験できました。

2 日目は夕方から自由行動だったので、ベルリンテレビ塔に連れて行ってもらいました。エレベーター列に並んでいると、たまたま公式キャラクターがやってきて、一緒に写真を撮ることができました。展望台からの眺めは抜群で、カティーとトニーは景色をいろいろ説明してくれました。トニーの職場のビルもよく見えました。その後、ショッピングをして、カティーとお揃いの T シャツを購入しました。

3 日目は、ポツダムに出掛けました。世界史の授業で学んだサンスーシ宮殿や同じ公園内にある中国風庭園を訪れることができ、本当に感動しました。贅沢すぎる装飾に目がくらみました。ポツダムのメインストリートの脇には、ニコルママと彼女のおばあちゃんが経営するおもちゃ屋さんがあり、訪問しました。プラスチックではなく、木や布といった子どもに優しいおもちゃを中心に取り扱っており、見た目もかわいらしい素敵なお店でした。カフェで大盛りパフェを食べたり、街歩きしたりして、夕方帰宅すると、ステファンパパが家の奥にある仕事場を見せてくれました。ニコルママに「カオスだけど、ステファンのことを嫌いにならないでね。」と言われ、ドキドキしながら案内されると、そこにはバナナの皮のオブジェやたくさんのお面、不気味なリアルすぎる人形が並んでいました。なんとステファンパパのお仕事は、シリコンを使ってホラー映画などの小道具を作ることだったのです。ハリウッド映画も手掛けているそうで、シリコン製作の腕はピカイチ。カオスな世界が広がっていて、本当に驚きましたが、今まで知らなかった一面を知ることができて、よりステファンのことを好きになりました！夜は、お庭でキャンプファイヤーをしながら、またずっとお話しました。

4 日目は、国会議事堂を眺めつつ、向かいに位置する連邦首相府（日本でいう首相官邸）を訪れました。建物内では、なんと幸運なことにメルケル首相に遭遇し、2 ショット写真を撮ることができました。お目にかかれただけで光栄なのに、SP に囲まれている中写真撮影までできるなんて想像もしていませんでした。肝心の目線を頂いた写真は少しぶれてしまいましたが、臨場感が伝わってくるものとなりました。カティは、メルケル首相と私の動画を撮影してくれていて、彼女の優しさに心を打たれました。その後は、興奮冷めやらぬまま、ドイツ技術博物館を見学しました。ここはとにかく広い博物館で、鉄道・航空・船舶など、ドイツが誇る様々な技術の歴史を知ることができます。価値のあるたくさ

んの展示物は私の予想をはるかに上回ってきました。足がくたくたになるほど歩き周り、結局閉館時刻までいてしまいました。お家に帰ると、ステファンパパがお手製ブリトーを作りながら待っていてくれていました。食後は、おばあちゃんの手作りデザートを食べながら、ドイツのロングセラーすごろくゲームを行い、寝床につきました。

最終日は、朝に家を出る時の、5 日間でかなり仲良くなった犬のメリー、猫のアポロとの別れから悲しかったです。夕方のさよならパーティーで、家族とお別れするのはもっと寂しく、つらかったのですが、温かく送り出してくれました。すばらしい 5 日間を本当にありがとうございました。

Berlin を通じて：たくさん笑ったし、深い話もできたかな 13 日間

今まで住んできた土地も話してきた言葉も異なる同世代の青少年と交流したことは、とても刺激がありました。異文化交流というと、違いを見つけることに重きを置いてしまう傾向にありますが、共通点を発見することも楽しく、有意義でした。行程中ずっと話していましたが、それでも足りず、今でも SNS で会話しています。ドイツ大好き！Dank

ホームステイ：忘れられない思い出　　柳　澄美

ホームステイ初日は、私のパートナーのナターシャ（Natascha）から聞いていた通り、お母さんと弟はベラルーシにいるということでお父さんにしか会うことはできませんでした。私はゴルミッツから帰って来たばかりで疲れていましたが、以前に食べたドェナー（Döner：日本では一般的にドネルケバブと呼ばれる）の美味しさが忘れられず、ナターシャと近くのお店に行きドェナーのホールを2人で半分に分けて食べました。ナターシャは大の韓国ファンで、ドェナーを食べ終わるとすぐにK-popの話をしてくれました。残念ながら私はK-popファンではないので、あまり共感できませんでしたが、何かに夢中になれるなんて羨ましいなと思いました。どうやらナターシャには6人の「夫」がいるようで、名前と顔を覚えてねと言われましたが、結局最終日にも覚えることができませんでした。（あまりその気が無かったのかも？）その日は夜も遅かったので、一通り韓国の話を聞き終わるとすぐに眠りにつきました。

次の日は、ナターシャがWerk9まで私を送ってくれました。中間報告を終え、「青少年との難民とのふれあい」を見たあと、ナターシャと同じ学校で、Nataschaがこのプログラムに参加するきっかけになったアニャ（Anja）の妹のマリー（Marie）の家に、由佳とそのパートナーのリナ（Lina）と泊まりました。マリーの家はとても広く、卓球台やプールまでありました。みんなでそのプールに入って遊んだ後、焼肉パーティーをしました。その日の気温は20度もなく、温水プールから出ると凍えるように寒かったのですが、寒さも吹き飛ぶほど楽しかったです。焼肉パーティーの後は、暖炉でマシュマロを焼いて食べました。食後には、ナターシャが私たちのMake upをしたいということで、私が一番手にしてもらいましたが、ナターシャはアジア人のMake upは初めてだったということで、オカマみたいな顔になってしまいました(笑)。一番最後にMake upをしてもらっていた由佳が一番良かったです。（私が一番最後にして貰えば良かった！！）

翌日は起きるともう10時でした。Marieの家で朝ごはんを食べ、Marieの両親にお礼を述べた後、急いでお家に帰って着替えて昼ごはんを食べる時間もなく、由佳、リナ、晃仁さん、そのパートナーのニック(Nik)とベルリン大聖堂の前の広場で待ち合わせをしました。ナターシャはお兄さんに用事があるそうで、途中でいなくなってしまいましたが、5人でベルリン大聖堂内に入って見学をしました。天井が高くキラキラして、パイプオルガンの音が聖堂内に響いていてとても素敵でした。実は、5時からジャンピングハウスというところでナターシャも合流して、そこでトランポリンで遊ぶ予定でしたが、大聖堂の魅力に見入

っているうちにあっという間に時間になってしまい、ナターシャを1時間弱も待たせてしまいました。トランポリンは6時から7時まで1時間楽しみました。私は、中学生の時毎日のようにトランポリンで遊んでいたので慣れていましたが、トランポリンは見た目以上に体力を使い、翌日は腹筋が痛くなりました。しかしとても楽しくてずっと笑っていました。夜は、ほとんどのメンバーで公園に集まってパーティーをしました。ドイツ人がお酒好きというのは本当で、孝行のパートナーのヤスパー（Jasper）は私と同い年にも関わらず、ビールを20本ほど箱で買って飲んでいました。途中ホームレスが話しかけてくるなど、緊張するような出来事もおきました。日本とは文化が全く異なるな、と思いました。

翌朝、昨日の疲れが溜まっていたのか起きたのは12時頃でした。日曜日でどの店も閉まっているので、リナと由佳とアレクサンダー広場で待ち合わせをしてのんびりして過ごしました。私がパスポートを盗まれてしまったので、近くにあった警察署でポリスレポートを発行してもらい、駅の証明写真のブースでパスポート用の写真を撮りました。そこでふざけて、プリクラのような写真を一緒に撮りました。その写真は、さよならパーティーでナターシャが可愛く飾ってくれました。

Berlinを通じて：ドイツの経験から学ぶこと

初めて日本で日本人のメンバーとあった時はお互い打ち解けておらず、メンバーの中で最年少であった私は、みんなと打ち解けられるのか、またはドイツに行った時、ホームステイ先の家族とは仲良くできるのかなど行く前から様々な不安を抱えていましたが、いざドイツに到着すると、メンバーもホームシスターもとても優しく、すぐに打ち解けることができて、あっという間に2週間が経ちました。

ドイツは1990年まで東と西に分裂していて、その当時の様子は未だに街中に残っています。今回のプログラムでは、様々な歴史の場に訪れる機会がありました。これまであまり歴史に直接触れる機会がなく、遠い昔の出来事のように感じていましたが、今回のプログラムを通じて、今というのは様々な歴史の積み重ねにより創られているのだなということを再認識しました。また、Isisなどの影響により、ドイツをはじめとするヨーロッパ各国では移民が急増しています。近年日本でもグローバル化が進んでおり、中でも新宿区には在日外国人の方の姿がよく見られるようになりました。グローバル化の利益、不利益をしっかりと認識し、その不利益を改善する必要があると思います。ドイツで伺った移民の方のお話を忘れずに、未来の日本を担う一人として、状況改善に努めたいなと思いました。

ドイツと日本はとても離れていて、文化も言語もその多くが日本とは異なります。その中で、私が安心して楽しく2週間を過ごすことができたのは、周りのみなさんのサポートが

あったからだと思います。このご恩を例えば2020年の東京オリンピックでボランティアをするなどして、なんらかの形でお返ししたいです。とりあえずは、今度のイースターにまたドイツの青少年と交流することを心待ちにしたいと思います。2週間ありがとうございました。

ホームステイ：Berlin の休日　　山口　翔子

私は、いつも元気でアートが大好きなリリット（Lilith）と彼女のお母さんにお世話になりました。ドイツ語を使ったホームステイは、初めてのことや楽しかったこと、驚いたこともたくさんあり、濃密で忘れられない 4 日間になりました。

ホームステイ 1 日目の夜、初めてリリットの家に入ったとき、お母さんが出迎えてくれました。緊張で上手く話せない私の挨拶をリリットとお母さんはゆっくりと聴いてくださり、3 人で食卓を囲みました。リリットが作ってくれたジンジャーティーはとても美味しく、落ち着くことが出来ました。その日はお母さんの体調が芳しくなかったこともあり、夕食後にリリットと映画「おおかみ子供の雨と雪」を見ることになりました。家のあちらこちらにはリリットの描いた絵やアート系の雑誌が置かれています。また、リリットはウクレレを弾くのが好きで、夜遅くまでいろいろな曲を弾いてくれました。

2 日目の夜は、夕飯をリリットと家の近所のピザ屋で食べました。イタリア式のピザだったのですが、薄いので折りたたんで食べるのだと言われ、驚きました。その後、オルガンのコンサートを聴きに行くため、トラムとバスを乗り継いでベルリン大聖堂（Berliner Dom）に向かいました。開演時間まで時間があり、博物館島を散策したり、本屋に入ったりしました。オルガンの演奏は普段の生活ではなかなか聴くことができないため、コンサートはとても楽しかったです。また、ベルリン大聖堂の内部は荘厳な装飾が施されており、日が落ちるにつれ、その表情が変わってゆく様は美しかったです。

3 日目はお昼過ぎまで家でゆっくりしました。それから、コルヴィッツ広場（Kollwitzplatz）で開かれていたヴォッヘンマルクト（Wochenmarkt：曜日を決めて開かれる市場）を散策しながら、ジュースを飲んだり、クレープを食べたりしました。日本とは違ってフルーツやクリームは乗っていません

が、とても甘かったです！他にも、野菜やお肉、ジャム、手作りの雑貨、アンティーク品など、様々なものが売られていて、見て回るだけでも楽しい時間が過ごせました！お母さんは､妹さんの誕生日プレゼントとして指輪を購入｡地元の人々にとってマルクト(Markt)は日用品だけでなく、贈り物を買ったり、食事をとったりする場なのだと教えてくれました。家に帰る途中に寄った本屋で、お母さんがベルリンの壁に関する写真集を見せながら当時についてお話してくださいました。その日の夜は、予定の合う日本とミッテ区の青少年でマウアーパルク（Mauerpark）集まり、スーパーマーケットでお菓子や飲み物を買って、一緒に喋っていました。日が落ちてからだったのでお互いの顔もすこし見えづらい状況でしたが、とても楽しかったです！

ホームステイも早くも最終日となった 4 日目は、リリットとお母さんと、ポツダムにあるサンスーシー宮殿（Schloss Sanssouci）に行きました！この宮殿は、プロイセン王であったフリードリヒ二世が夏の離宮として造らせたものです。リリットとお母さんは以前も訪れたことがあったのですが、その広さゆえ、全ての建物を見ることは出来なかったそうです。外観は明るい黄色が印象的ですが、中に入るとたくさんの小部屋があり、天井や壁紙、調度品に至るまで、細かな装飾がなされていました。レリーフのように、王自身がデザインを考えたものも多く、彼がこの宮殿を大切にしていたことが伝わってきます。彼が生前、愛用していたというフルートや、亡くなる際に座っていた椅子も展示されており、宮殿のそこかしこから彼の息遣いを感じられるようでした。また、併設されたギャラリーやオランジェリー宮殿(Orangerieschloss)も見学しました｡サンスーシー宮殿とは違って部屋の数は少なく、装飾も華美なものというより、きっちりと設えられている印象を受けます。その後、樋口さん、中田さん、ニクラス（Niklas)、マーヴィン（Marvin)、マーヴィンのお祖母さんと一緒に、ツェツィーリエンホーフ宮殿（Schloss Cecilienhof）へ向かいました。もとは、ドイツ帝国の皇太子のために建てられたものでしたが、今ではポツダム会談が開かれた場所として知られています。中では、この宮殿の歴史に加え、第二次世界大戦の流れや、ポツダム会談開催時の世界情勢、会議についての展示がされていました。また、実際に会議が行われた部屋や、イギリス、アメリカ、ソ連のそれぞれの控室も公開されており、日本やドイツの戦後を決定づけた歴史の重みが感じられました。Berlin に戻った後、お夕飯に韓国料理を食べ、家に帰りました。

一緒に歌ったこと、お出かけをしたこと、食事をしたこと……、Berlin の日常風景をすこしだけ覗くことができたように思います。リリットとお母さんと過ごしたこの 4 日間、

とても楽しかったです！Vielen Dank!!!

Berlin を通じて：13 日間のたくさんの出会い

　ドイツで過ごした 13 日間は、楽しかったこと、驚いたこと、言い切れないほどたくさんのことがあり、最高の時間でした。美しい街並みやおいしい食事はもちろんのことですが、それ以上に、たくさんの人と出会って刺激を受けることができ、貴重な経験になりました。たとえば、ホロコースト・メモリアルやベルリンの壁など、説明を伺う中で、その歴史と向き合っていくことの大切さを感じました。一方で貧困問題や移民など、現在の Berlin が抱える課題や街歩きの活動についても知ることができ、より一層、ドイツに興味を持ちました。何よりも、ミッテ区の青少年や、日本人のこのメンバーと出会えたことは、プログラムの中でも一番の財産になったと思います。ドイツ語での会話は予想以上に難しく、なかなか言葉が出てこず、もどかしい思いを何度もしました。だからこそ、「伝えたい」、「もっと知りたい」と、物事に意欲的に取り組んでいくことの重要性を感じました。また、質問の時間やディスカッションでは、自分の考えをしっかりと発信していく姿勢が印象的でした。語学力だけでなく、ドイツの歴史や文化、政治など、今回のプログラムで学んだことについて、もっと知識を深めたいです。そして、またドイツに帰ってきたいと思います。日本人のメンバーの方々には、大変お世話になりました。様々な視点や考え方に触れ、将来の進路についても考えることができました。13 日間、一緒に過ごすことができてとても楽しかったです！

　最後になりましたが、団長、すみさん、陽子さん、オリバー、ノーベルト、アンニャ、マドレーン、プログラムに携わってくださった新宿区、ミッテ区の皆様、ミッテ区の青少年、日本人のメンバー、本当にありがとうございました！！！ドイツ、大好きです！！！！！

ホームステイ:4 日間の楽しすぎたホームステイ　　吉野　皓

僕の受け入れ先の家族は僕と相性が本当にぴったりでした。ドイツから帰る時、悲しくてたまらなかったです。僕のパートナーのティル（Till）イケメンで高身長で優しいという日本に来たら完璧なモテ男になるタイプの人でした。僕の拙い英語も必死で理解しようとしてくれて、いつも全力で応えてくれました。短い間でしたが、本当の兄弟のように仲良くなれたと思います。ティルの家族は、ドイツでは分からないが、日本では確実にお金持ちと呼べるレベルでした。というのも、家の庭はとても広く、家庭菜園を行っていて、プールはもちろん、サウナまであるのです。ティルにはハナトいう妹がいます。ピアノが上手くて元気で活発な女の子でした。12 歳なのに身長は 16 歳の僕と殆ど同じで、柔道をやっているらしく体格は僕よりもしっかりしていました。ティルの母、ジャネットはとても優しく、ホームステイが終わる頃には僕の第 2 の母となっていました。ティルの父、シュテファンはとても穏やかで思いやりある人でした。僕が調子に乗って羽目を外してしまった際に止めてくれるのは、いつもシュテファンです。でも、高速道路を走りだすと時速 160 km以上出すので、「事故起こしたら即死だなぁ…」とヒヤヒヤしました。

さて、ホームステイ初日の夕方は、同じ新宿区青少年メンバーの孝行、彼のパートナーであるヤスパー（Jasper）、ティル、そして僕の4人で「ジャンピングハウス」というトランポリンのレジャー施設に行きました。床も壁も一面トランポリンで、途中調子に乗ってバク転をしていたら見事に顔面強打して鼻血が出るハプニングもありましたが、それくらい面白いです。とても良い運動になった上、そこにいた同

世代のドイツ人達とも一緒に遊びながら交流できました。その日の夕食はバーベキューでした。驚くことなかれ、ドイツに来てからこれで5回目のバーベキューです（笑）。肉を頬張りながら、楽しくホームステイ先の家族と、日本やドイツならではの習慣について話しました。同じ地球上の人類なのに文化がここまで違うのかと驚きました。最高に美味しかったのですが、1つだけ何の肉か分からないものがあり、質問して答えてくれたけれども、その返事の中に固有名詞が多すぎて結局何の肉か判明しないまま終わると言う珍事も起きました。

2日目は、田舎の方に行ってカヌーをしました。僕のイメージでは、30分くらいで終わるだろうと思っていたのですが、なんと4時間ずっと漕ぎ続けました。終わる頃には、僕は一言も喋らず真顔でただただ膨れ上がってパンパンになっている自分の腕をおさえることしかできませんでした。ティル一家は平気なようで、外国人のパワーを思い知りました。でも、景色は本当に綺麗でした。

最終日は、まず午前中に強制収容所へ見学に行きました。ドイツが第二次世界大戦中に犯したことをしっかりと学びたかったからです。もちろん覚悟して行ったつもりでしたが、想像以上に過酷なものでした。収容所は、5mはあると思われる壁に周囲を完璧に囲まれていて、所々に監視塔が建っていました。壁には銃弾の痕も残っています。逃げようとした人々に行った行為の悲惨さや残忍さが、70年経ってここを訪れた僕にもひしひしと伝わってきました。遺体を焼却する焼却場では涙を抑えるので必死でした。ただユダヤ人だからという理由で虐殺し続けたナチス。憤りしか感じません。人種で人を選別し、あまつさえ虐殺するような行為は二度と繰り返してはならないと改めて感じました。午後は、孝行達と合流してプールに行くことになっていましたが、ヤスパーが叔父さんと食事することになったから無理ということで中止になってしまいました。諦めて帰っていたら、ヤスパーと孝行から、今から行けるという連絡が入ったので、近くの予定とは違うプールに行きました。最初は泳いだりしていたのですが、水が冷たすぎてすぐに上がって、皆でひなたぼっこをしました。偏見なのかもしれないが、外国人は腹筋がバキバキに割れていると思っていたのに、思いの外そんなことはなく、外国人に対する恐怖（？）のようなものが消えました。短い間でしたが、僕の記憶にしっかりと残る本当に大切な思い出となりました。

Berlinを通じて：学んだこと

このミッテ区青少年交流派遣を通じて本当に多くのこと学びました。とりわけ、世界の広さを実感することができました。同じ人類であり、同じような進化をしてきたはずなのに、ここまで文化が異なるものなのかと驚きの連続でした。そして、ドイツの強制収容所や博物館に行ったことで、日本と同じ第二次世界大戦の敗戦国でありながら、復興の仕方など歴史の辿り方が全然違うことが分かりました。このような機会がまたあれば、ぜひ参加したいと思います。

ホームステイ：充実した 4 日間　　渡辺　由佳

私のホストシスターは 15 歳のリナ（Lina）で、5 歳の弟とベトナム人のお母さん、ドイツ人のお父さんと住んでいました。

ホームステイ初日、家に着いたのは夕方で、さっそく自己紹介を、習った簡単なドイツ語で行いました。お母さんもお父さんも英語があまり話せないため、その時は分かりませんでしたが、リナから後で聞いたところ、ドイツ語での自己紹介はかなり好印象だったそうです。リナは英語、ドイツ語、ベトナム語を家の中で話していました！弟のダニーロ（Danilo）は、基本ドイツ語ですが、最近学び始めた英語も少し使うのを楽しんでいてかわいかったです。

さて、自己紹介のあとは夕食です。1 人ひとりの大きなお皿にフライドキチンにチーズが入っているものとつぶしたポテトがどっさりのっていました。後で聞いたのですが、お母さんは私のことをもてなそうと、普段作らないザ・ドイツ料理というものを頑張って作ってくれたそうです。しかし、その時は慣れない味やじゃがいもの多さでお腹がすぐにいっぱいになり、あまり食べられませんでした。箸が進まない私に気づいたリナは無理しなくていい、捨てていいよ、と言いました。リナも少し残していて、ゴミ箱に入れていました。普通だから、と言われましたが、捨てるのは抵抗があり、いい気持ちはしませんでした。その後リナの部屋に行き、パソコンで洋楽を聴きながら普段の生活などについて楽しく話しました。二段ベッドでリナと寝ました。

ホームステイ 2 日目の朝、リナと向かった Werk9 に到着したのは集合時間の 15 分遅れになってしまいました。焦りと申し訳なさと疲れで、まだまだ続くホームステイのことが不安になっていました。その日はリナと同級生だった、マリー（Marie）のお家にマリーのパートナーの優奈と、同じく同級生だったナターシャ（Natascha）とそのパートナーの澄美とで、お泊まりしました。

マリーのお家はとても大きかったです。そこではまず、Wii の「JUST DANCE」というダンスで対戦するゲームをして、大いに盛り上がりました。その後、家にあったプールに入り、はしゃぎまくりました！バーベキューをし、肉やチーズなど、たくさん美味しいものを食べ、暖炉のようなものにマシュマロをかざし、食べました。その後、ナターシャによる、メイクアッ

プ大会が行われました。澄美、優奈、由佳（私）の順でメイクをしてもらいました。ナターシャとリナが毎日きっちりメイクをしていたのは驚きでした。ということで、道具もたくさん持っていて、それを駆使して澄美や優奈にメイクしているのを見ているのは面白かったです。出来上がると、とんでもなくて、オカマみたいになってしまいました。ナターシャはアジア人の顔にメイクするのは慣れておらず、失敗したと言っていました。3 番目の私のころになると、だいぶ慣れて、出来上がりには満足しているようでしたが、私には良いのかさえよく分からず、不思議な気分でした(笑)。1 人あたり 50 分くらいかかったので、夜も遅くなり寝ました。

ホームステイ 3 日目の朝、クレープのようなものをたくさんの種類のジャムや砂糖、シナモンなどで、おいしく頂きました。その後、マリーのお家の卓球台で卓球をしました。そして、とうとう、充実していて最高に楽しかったお泊まり会は終わり、一旦それぞれの家に帰り、アレクサンダー広場（Alexanderplatz）でナターシャ、澄美と待ち合わせしました。家に帰ると、お母さんがベトナムのお菓子を作っていて、お米が入ったもので、とても美味しかったです。

アレクサンダー広場に着きましたが、ナターシャは用事があって 1 回帰り、また後で会うことにしました。そして、かねてから行きたかったベルリン大聖堂（Berliner Dom）の前でリナ、由佳（私）、澄美に加え、晃仁さんとそのホストブラザー、ニクラス（Niklas）と待ち合わせしました。チケットを買い、ベルリン大聖堂の中に入ると外から見るより大きく、とても豪華でした。天井が高く、その隅々まで装飾が施されていて、パイプオルガンの音とマッチしていて、圧巻でした。上の方に上がると、外の装飾がすぐ近くにあり驚きました。その後、「JUMP HOUSE BERLIN」という、トランポリン施設でナターシャと合流し、1 時間、トランポリンで跳びまくりました。東京の、似たところに行ったことがありましたが、大きさがベルリンの方が断然大きく、楽しめました。その後、マウアーパルク（Mauerpark）という大きな公園に行くと、今回参加した青少年がたくさん集まっていました。そこで、何をするでもなく、

話したりして夜遅くまで楽しみました。そこの雰囲気は味わったことのないもので、不思議な気分でしたが、ニクラスは、ドイツ人の若者は、こういうことをよくする、と言っていました。その日は疲れて、家に帰ったらすぐに寝てしまいました。

ホームステイ最終日、その日は 10 時くらいに起きました。アレクサンダー広場でナターシャ、澄美と待ち合わせして、お土産を買ったり、ヴィーガンのための屋台を見たりして、ゆっくり時を過ごしていました。その後、ナターシャとリナのおすすめのタピオカのお店、「Bubble Tea COMEBUY」に行ってタピオカドリンクを飲みました。そこに行くと、びっくり！ほとんどのお客さんがアジア人でした。人気のお店で、お客さんであふれていました。また、その中にはナターシャとリナのお友達がたくさんいて、驚きました。店内には、たくさんの日本の漫画も置いてあり、嬉しく思いました。みんなで楽しんだ後、リナの家に帰り、弟のダニーロとジェンガで遊んだり、リナと映画を見ながら、日本から持って行った折り紙で遊んだりしました。その日の夕食は、ベトナムの家庭料理でした。多分、ベトナムのお菓子をとても美味しそうに食べていた私を見て、その方が良いのかもしれない、と思ってくれたのだと思います。焼いた鶏肉と、香り高い野菜を、そうめんのような麺と一緒に食べる料理で、本当に美味しかったです！その夕食の間、お父さんとも、リナを介して沢山会話をすることが出来て嬉しかったです。お父さんは、日本の電気会社や家のことなど、多岐に渡って日本に興味を示してくれました。

Berlin を通じて：たくさんの人との出会い

今回、たくさんの素晴らしい方々に出会えたことが私の一番の収穫だと思っています。日本人・ドイツ人青少年をはじめ、ホストファミリー、訪問した場所で出会った人々、このプログラムを支えてくださった、陽子さんや、澄さん、団長、オリバー、アニャなど大人の方々にも気にかけてもらい、支えられて、得られたものの多い、13 日間を過ごすことができました。私にとって初めてのホームステイも初めは、馴染めるのか、また家族の方々に受け入れてもらえているのか、とても不安でした。しかし、リナに思っていることを伝え、また家族にもそれを伝えてもらうと、必ずわかってくれます。言葉より何よりも、簡単なドイツ語でも、積極的に使って感情や感謝を伝えようとする姿勢を向こうも感じとってくれます。実際、お母さんは、食事を途中から、私が好んだベトナムの家庭料理に変えてくれました。今回、英語圏ではないドイツに行って、言語は道具でしかないことを改めて感じました。ドイツ語もベトナム語も全く知らない私が、少しの英語だけで、ドイツ人とベトナム人しかいない家で楽しく過ごすことが出来たのですから！今はそんなホストファミリー、一緒に短い時を過ごした全ての人、そしてドイツの豊かな自然やきれいな空気が恋しいです。ありがとうございました！

青少年派遣職員回想録

2017 青少年交流を終えて
派遣団 団長 諏訪 丹美

2017 青少年交流に参加された皆さん、そしてミッテ区の皆さんお元気ですか。
その節は大変お世話になりました。今回、この交流事業を振り返る場をいただいたので、私なりの感想を述べさせていただきます。

この青少年交流では、基本的に地下鉄や電車、徒歩で移動することで、街を肌で感じる大変すばらしい経験を得られたと思います。観光などで海外を訪れると、得てしてバスで観光地をめくるパターンが多く、その街の生活実感は得にくいものです。皆さんは更にホームステイで、実際ベルリンに住むという感覚の一部を経験することができましたよね。

私が皆さんの後ろについてミッテ区の街並みを歩きながら感じたのは、異国情緒というよりは親近感でした。歴史を感じる重厚で美しい街並みは、雑然とした新宿区とは全然違うと思われる方もいらっしゃるでしょうが、私にとってミッテ区の街並みは、どこか親しみを感じるものでした。ウンター・デン・リンデン通り辺りは、銀座周辺や皇居、迎賓館、外苑かな。Werk9 よりの繁華街は新宿大通りのよう、トルコ、イスラエルの料理をいただいた周辺は大久保通りあたりでしょうか。

ただ、ベルリン全体が私たち以上に度量が広く、鷹揚且つ自然体で様々な立場の人々を受け入れているように感じました。あれはベートーベン「交響曲第九番」の、Alle Menschen werden Brüder の精神なのかな?

その心意気は、街全体におおらかな雰囲気を醸し出しています。電車に乗り込むと、大型犬や自転車が普通に何の違和感もなく同乗してくる様は、東京では考えられない風景で、あらゆる立場・生き方を受け入れようとするベルリンの街の余裕を感じました。様々な課題もあるのでしょうが、私たちがもっと見習うべきところかもしれませんね。

皆さんは、Werk9 での移民の子供たちのイベントや、ゴルミッツでのワークショップ、そして何よりも自身のホームステイを通じて、異なる習慣やルールの人を受け入れるときの違和感とともに、自身が異なる習慣やルールの中に入っていくことの難しさも感じたことでしょう。けれども、それ以上の楽しさと喜びも知ったはずです。

ドイツで、「日本は島国で異なるのでしょうが、ミッテ区は移民の多い地区です。」というレクチャーを受けましたが、実は新宿区も大変多くの多国籍住民が生活をする街であるということを皆さんは既にご存じてすよね。

2020 東京オリンピック・パラリンピック大会を控え、新宿の街は今後ますます賑やかに多様化することでしょう。そして、皆さんが社会の中心を担う年代になった頃、更にグローバル化が進行した世界で、ミッテ区・新宿区、それぞれの街はどのように変わっているのでしょうか?　それとも変わらないのでしょうか?

それは、これからの皆さん世代の取り組みと選択によって決まること。楽しみですね。

最後に、この青少年交流事業が両区の未来の希望につながること、そして今回受け入れにご尽力いただいたミッテ区の皆々様に幸あらんことを願いつつ・・・

Auf Wiedersehen.

青少年派遣職員回想録

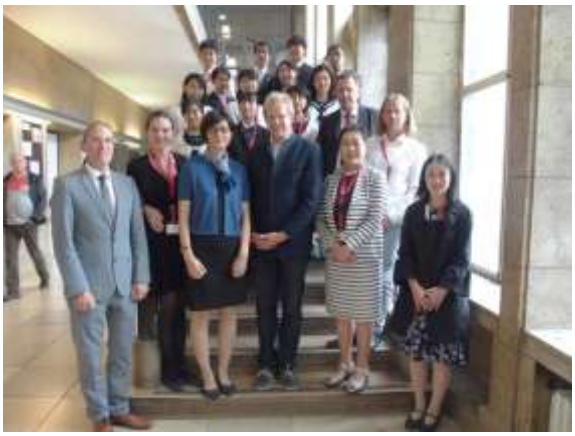
文化の違いを理解するには
随行職員　嘉山　澄

2015 年に引き続き 2017 年のミッテ区との青少年交流に随行することとなり、前回よりプログラムの様子を把握していることを活かし、青少年のよりよい交流となるよう務めたいと臨みました。

ミッテ区では、今回も新宿区と同世代の青少年と交流する機会を沢山設けてくれました。文化の違いをどう捉えるかといったワークショップとディスカッションは、外国人住民が多く住む新宿区でも必要な気づきができたのではないでしょうか。また、自分とは違う文化を持つ人々に寛容になるいい機会だったと思います。

随行中、ある青少年のホームステイ先が途中で急に変わることとなり、本人を不安にし、日本にいる親御さんにもご心配おかけしました。今後の交流のためにも、ミッテ区とホームステイの受入れのあり方について話し合いをしました。その中で、新宿区の家族全員での「おもてなしの心」での受入れと、ミッテ区の「青少年同士（友だち同士の関係に親はあまり関与しない)」のやりとりを中心にした受入れという文化の差も感じました。新宿区の思いをミッテ区の担当職員に理解していただき、今後に活かしていくことになりました。

様々なところで文化の違いに接しましたが、違うのが悪い、違うから仕方ないではなく、お互いを理解し合える様にコミュニケーションを取ることがいかに重要なことであるか実体験として改めて学びました。異言語の狭間でコミュニケーションの間に立っていただいた通訳・コーディネーターの陽子さんには、大変助けていただきました。両区青少年の様子まで見ていただき感謝の限りです。



青少年交流は、多感な時期を迎えた青少年たちにとても強い刺激を与え、ものの見方・考え方が柔軟となる機会として人材の育成に役立っていると感じています。これからの青少年にも機会が与えられるよう交流が続いていくことを願っています。

スリ・パスポート紛失等々色々ありましたが、実りある 13 日間でした。ミッテ区の

Dassel 区長、Gothe 副区長、Oliver、Norbert、Anya。ホームステイの受入やプログラム中多くのことを経験させてくださいましたミッテ区の皆様。また、青少年を送り出してくださいました保護者の皆様。皆様のおかげで青少年たちは、素敵な時間を過ごすことができました。心から御礼を申し上げます。

また、ミッテ区からの青少年を受入れる時、大きな感動、経験を持って帰れるよう充実したプログラムでお出迎えをしたいと思います。